
イナズマイレブン世界への挑戦！オルフェウスIF

烈兄貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブン世界への挑戦！オルフェウスIF

【Nコード】

N2677V

【作者名】

烈兄貴

【あらすじ】

遂にFFI本戦へと駒を進めた円堂達イナズマジヤパン。

半田真一は彼らを応援しに舞台となるライオコット島へとやってきた。

しかし、彼はそこで意外な人物と出会う

設定（前書き）

設定集を置いておきます。とはいっても、これといったことを書いてあるわけではありませんが。いろいろとオリジナル技があります。キャラ・文は増えていく予定です

設定

フィディオ・アルデナ

イタリア代表オルフェウス副キャプテン。ポジションはFWで背番号10。

こげ茶色をした髪で青い瞳をしている。華麗なテクニクとスピードを併せ持ち、フィールド全体が見えているような指揮もする「白い流星」という異名を持つヨーロッパを代表するエースストライカー。

今は放浪中のキャプテンに代わり、オルフェウスメンバーをまとめあげている。いつかはキャプテンのような選手になりたいと思っている。

イタリア国内では非常に注目されており、サッカーに興味がなくともフィディオを知らない人はいないほど。女性に非常に人気があり、また男の子からは日本でいう野球のイロー選手のような憧れの存在となっている。

父も同じくサッカー選手だったが、自分のプレイに限界を感じ荒れていた。フィディオはそんな父を見ても彼のプレイが好きで今もサッカーをしている。

半田が荒れた父の被害を受けていた事は後になって知った。半田が傷つきサッカーをやめた事に関して、父も自分が荒れていた事を反省し、以降は落ち着いている為、フィディオは彼を責めたりしていないが、半田がサッカーをやめたまま別れたことについては悲しいではいる。

必殺技は、魔方陣を出現させそこからシュートを放ち、巨大な剣でゴールを突き刺す「オーディンソード」一瞬にして相手の死角に忍び込んで突破・もしくはボールを奪う「フェイドアウト」

半田真一

フィデオの異母兄弟。実はイタリア生まれ。イタリア人の父と日本人の母を持つハーフだが、母親の血が濃いのか日本人らしい容姿になっている。母親がいい加減であった為、半田が生まれる以前に離婚し父はフィデオの母親と結婚している。

離婚し、半田が生まれてからは母親もしつかりしてきた為母子家庭でも何とか生活している。母親が家事苦手なため、幼いころから手伝いをし小学校4年生あたりからは料理を始めていたため家事はそこそこ得意。達人・プロとはいかないが、主婦なみには上手。

8年前に、父を通じてフィデオと出会い2年ほど、イタリアのアルデナ家で過ごすことになる。父のプレイにあこがれを抱いていたが、父がプレイに限界を感じ、荒れた生活を送る中、半田は虐待を受けてしまい、父親を幻滅。サッカーをやめてしまい、そのまま日本に帰る。

日本に帰ってきてからも1年ほどはふさぎ込んでいたが、徐々に回復。しかし、サッカーはずっとしておらず、中学の頃に円堂のサッカー熱にあてられ、再びサッカーを始める。

マーク、テレスとはイタリアに住んでいたころに知り合い友達となつた。

必殺技は、大胆な回転をしながらその力を使って強力なシュートを放つ「ローリングキック」

???

オルフェウスのキャプテン。ポジションはMFで背番号7。

放浪の旅に出ており、その間はフィデオにチームを託している。

マルコ・マセラッティ

オルフェウスのDFで背番号5。

赤紫色のふんわりパーマで、グリーンの瞳をしている。パスタ作りが趣味で生地から作る。誰とも分け隔てなく接する明るい性格で、オルフェウスのムードメーカー的存在。

必殺技は、数多の剣を出現させ相手のボールに降らせて無力化する「グラディウスレイン」ジャンルカと共にボールを蹴りあげ、その後マルコは足を振り下ろすように、ジャンルカは足を振り上げるようにしてボールを蹴り巨大な矢となったシュートを放ちゴールを撃ち狙う「アポロフラッシュ」

ジャンルカ・ザナルディ

オルフェウスのMFで背番号16。

褐色の髪で、ブルーの瞳をしている。一流のゴンドラのこぎ手になるべくベニスで特訓中。クールだが、無愛想とかではなく笑ったり怒ったりすることもよくある。その一方、落ち込みやすく打たれ弱い所もある。

必殺技は、荒波の如く動くボールを放ち、その勢いで相手を吹き飛ばしなら突破する「テヴェレドリフト」マルコと共にボールを蹴りあげ、その後ジャンルカは足を振り上げるようにし、マルコは足を振り下ろすようにしてボールを蹴り巨大な矢となったシュートを放ちゴールを撃ち狙う「アポロフラッシュ」

アンジェロ・ガブリーニ

ポジションはMFで背番号6。

金髪で天使のような容姿をしている。小柄で女の子のような外見だが、すでに何度も賞をもらっているカメオ職人でもある。明るい性格で場を和ませる事が得意なオルフェウスのマスコットの存在。声は容姿とは裏腹にれっきとした男の子。

必殺技は、天使となり空を飛んで敵をかわす「エンジェルフロウ」
天使の輪を蹴り放ち相手からボールを奪い取る「エンジェルリング」

ラファエレ・ジェネラーニ

ポジションはFWで背番号11。

茶髪で頭にヘアバンドをしており、目つきが鋭い。中学生ながらトップモデルでその目つきからか、ファンから『ラファエレ様』と呼ばれているとか……。口調は少々荒く、素直ではないが、優しい一面も持っている。

必殺技は周囲を氷世界と貸し、ゴールに強力な氷の槍を蹴り放つ「フリーズショット」

ジジ・ブラーシ

ポジションはGKで背番号1。

褐色肌で顎が割れており、バイオレット色のバンダナをした巨漢。安定したセービングを誇るイタリア最高の守護神。フィディオとまではないかないが、イタリア国内では有名となっている。チームを大事にしているため、かつての半田のように外来者である半田を認めようとしない。

必殺技は、闘技場のような壁を召喚し敵のシュートを防ぐ「コロッセオガード」

円堂守

おなじみ我らがイナズマイレブンの主人公。だけど、今回は主人公ではない。日本代表イナズマジパンのGKにしてキャプテン。

まるで『太陽』のように明るく、熱く、どんな時にも諦めない根性を持ち併せており、そのカリスマ性でチームを引っ張る。

半田と染岡を部員にいれ、サッカー部として活動を開始。当初は極小さな、小規模の同好会ぐらいでしかなかったが、部員をほとんど

ん集め、しまいにはフットボールで優勝を果たす。新しい仲間を引き連れ、今度はF F I、世界の舞台で優勝を目指す。

必殺技は、巨大な手を召喚しシュートをキャッチする「ゴッドハンド」巨大な魔神を召喚しシュートをキャッチする「マジンザハンド」ゴッドハンドの力を手に集約し、その拳でシュートを沈黙させる「いかりのてっつい」ゴール前に異次元フィールドを展開しシュートを弾き飛ばす「イジゲンザハンド」ゴッドハンドの力を頭に集約しその力で強力なヘディングシュートを放つ「ゴッドヘッド」等

立向居勇氣

イナズマジャパンの副G K。

大人しく弱気に見られがちだが、負けん気・根性・熱血度は円堂達にも引けをとらない。元々はM Fだったが、円堂に憧れを抱いてG Kになった。その『憧れ』はまさしくファンそのもので、円堂の前にでると緊張のし過ぎで行動がぎくしゃくしたり、円堂と握手した際はその手を一生洗わないというほど。

必殺技は円堂とは色が違い青色の「ゴッドハンド」「マジンザハンド」数多の手を召喚しシュートに幾重にも手を集め掴み取る「ムゲンザハンド」

鬼道有人

イナズマジャパンの司令塔でM F、背番号14。

基本的に冷静で言動も非常に理性的。帝国学園にいた頃は非情、または冷酷とも取れるような言動をしていたが、影山を裏切り雷門中に入ってから性格が変わったように丸くなっている。

必殺技は相手に幻のボールを見せ困惑している間に突破する「イリユージョンボール」二人（豪炎寺、一之瀬、佐久間、吹雪の内）が蹴りあげたボールを鬼道が蹴り、召喚した数多のペンギンが相手ゴ

ールに怒涛の勢いで迫る「皇帝ペンギン2号」等

一之瀬一哉

アメリカ代表ユニコーンのMF。「フィールドの魔術師」と呼ばれるほどアメリカでは有名な選手。

アメリカからの帰国子女。かつては雷門中にいたこともあったが、アメリカを大国にする為、帰国しユニコーンのメンバーとなる。陽気でさわやかな屈託のない性格で、二本の指を立てる仕草が癖。

必殺技は強力な回転をかけながらシュートを放つ「スパイラルショット」ペガサスを召喚し、その角で敵ゴールを突き刺す「ペガサスショット」手を軸にして火を纏った足を回転させ、その火をもって敵ボールを奪う「フレイムダンス」

マーク・クルーガー

ユニコーンのキャプテン。ポジションはMFで背番号9。

黄土色のくせつ毛の髪で、鼻が高くグリーンの瞳をしている。チームを引っ張るアメリカのスター選手。クールな性格をしており、あまり表情を変える事は多くない。フィディオ、半田、テレスとは旧知の仲で、別れる前にサッカーをやめてしまった半田を心配していた。

必殺技は、人に空高く上げてもらい羽で舞い上がり相手に天の輝きを浴びせ目くらましとし突破する「ジ・イカロス」ディランと二人で左右から同時に蹴りユニコーンを召喚し、その角で敵ゴールを突き刺す「ユニコーンブースト」巨大な狼を召喚し、マークが蹴ったボールをディランと一之瀬が二人で蹴り上げ、高い所からマークが蹴り、居てゴールを蹂躪する「グランフェンリル」

テレス・トルーエ

アルゼンチン代表ジ・エンパイアのキャプテン。ポジションはDFで、背番号2

深緑色の長髪で顎が割れており、褐色肌をしている。ぶつきらぼうで少々口が悪いが、根が悪いわけではない。鉄壁の守備力を誇っている。フィディオ、半田、マークとは旧知の仲だが、素直になれないためか、半田を除く3人の中では一番交流が少なくなっている。必殺技は、巨大な鉄の壁で相手の進行を一切許さない「アイアンウォール」

ロココ・ウルパ

コトアール代表リトルギガントのキャプテン。ポジションはGKで、背番号1だがFWもやることがありFWの時は18番。

褐色肌で、ピーコックブルー色の髪。無限の可能性を秘めているが、それとは裏腹に円堂と同じように明るい熱血漢で、負けず嫌いで半田が「円堂みたい」と言うように円堂と似ている部分がある。

昔はいじめられっ子であつたらしく、チーム1の落ちこぼれだったが、大介の言葉を受け一心不乱の努力を続けた結果、大介にして世界最強のプレイヤーと言わしめる程に成長した。

半田とは、夜の練習中に偶然会い、それ以降、二人で夜の練習をやつていくことになる。

必殺技円堂とも立向居とも違う赤色の「ゴッドハンド」「ゴッドハンドの力を両手に集中させ、手を交差させてシュートを捕まえる「ゴッドハンドX」ボールを蹴りあげ、ゴッドハンドの力を足に集中し、回転しながらクロス状にボールを蹴り圧倒的なパワーをもってゴールに迫る「Xブラスト」

数年ぶりの再会（前書き）

既存のキャラについてもオリジナル設定があったり、展開もアニメやゲームとは大きく異なります。

数年ぶりの再会

「ここがライオコット島・・・世界の舞台か」

円堂達イナズマジャパンがフットボールフロンティアインターナショナル（FFI）本戦に出場する事になり、その時期が近くに迫ってきたということで開催地であるここに応援しにきた。

「それにしても、円堂達がFFIに出場するなんてな」

ちなみに俺は半田真一。イナズマジャパンでもGK兼キャプテンを務める円堂守がキャプテンの雷門中サッカー部員だ。こうみえても円堂と同じくイナズマジャパンメンバーの染岡竜吾と共に雷門中サッカー部最古参メンバー3人の内の一人だ。3人の中で俺だけイナズマジャパンに入る事はできなかったけど・・・

「って駄目だろ。暗い気持ちのままあいつらに会ったって応援なんてできない」

せっかく円堂達が夢を叶えてFFIに出場することになったんだ。落ち込んでる俺がいつまで暗い気持ちにしたいくない。それに、皆にはエイリア石に取り込まれてた俺達を救ってくれた恩もある。純粹に応援したい気持ちもあるけど、何かの形で恩返しをしたい。

「それにしても、皆はどこにいるんだ？」

このライオコット島は選手達が真の実力が発揮できるよう各国の街並みが再現されているらしい。今俺がいるジャパンエリアも見事に日本の街並み（といっても京都のような和の雰囲気はないけど）を見事に再現されている。でもおかげで道が入り組んでいて皆を探すのが面倒だ。ここまでしなくてもいいのに、と思う・・・ちゃんと皆にきいとけばよかったんだけど。ライオコット島に応援に来ているのは俺だけだ。他の雷門中メンバーは来ていない。円堂達が本戦出場が決まったというのをきいて場所もろくにきかず来てしまったというわけ。俺もそこまでサッカーバカだったのか、ただのバカなのか。前者の場合は円堂の影響だろう。後者の場合は・・・認め

たくない。

「とにかく誰かにきかないと」

このままでは迷子になってしまう。そう思っていると前方に青いユニフォーム、こげ茶色の髪をした人物をみかけた。たぶん外国の選手だけど、身長はそこまで高くはない。後姿からだけど、怖い人物でもなさそうだしあの人にきいてみよう。そう思って俺はその人に声をかけた……

「あの、すみませ……っ」

んだけど、その顔を見て俺は驚いた。数年ぶりだけど、見間違るはずがない。

「ファイ……ディオ……？」

「……シンイチ……？」

そこには、ファイディオ・アルデナ……俺の異母兄弟がいた。

数年ぶりの再会（後書き）

どうも、作者の烈兄貴です。小説投稿は今回が初となります。

この物語はイナズマイレブンというアニメのFFI編を題名の通りオルフェウス視点としたIFストーリーとなっております。

また、読まれた方はわかっているとは思いますが、オリジナル設定及び展開となっております。その点を考慮していただけると幸いです。

どのくらい続くか作者もわかりませんがお付き合いいただければと思います。感想、意見等お待ちしております！それでは！

半田とフィディオと一之瀬

「フィ・・・ディオ・・・？」

「・・・シンイチ・・・？」

後ろから声をかけられて振り返り、その顔を見て俺は驚いた。母親は違うけど、たった一人の俺の兄弟。数年ぶりだけど見間違えるはずがない。・・・でも、なんでシンイチがここにいるんだ？

「なんでシンイチが？」

「俺は・・・イナズマジヤパンを応援しに来たんだ。ここにいる理由なんてそれしかないだろ」

シンイチは気まずそうに答え、今度は俺の顔をじゅつと見てきた。

「????？」

「何でフィディオが・・・って俺も訊こうと思ったけど、その服を見たら、そうなんだよな」

見つめ続けられ、俺が首を傾げると視線を俺のユニフォームに向けながら言ってきた。

「え？ああ・・・。うん、俺、イタリア代表オルフェウスの一員になったんだ」

「そっか、すげえな」

そういうシンイチの返事はそっけない。言っておくと、（少なくとも別れた時は）決してシンイチとの仲は悪かったわけじゃない。もちろん、あれから数年何の連絡もなかったのだから気まずくなる、というのもあるだろうけど・・・

「シンイチ・・・もしかしてあの時サッカーをやめた事、まだ気にしてる？」

「っ！」

シンイチが驚いたように顔をあげた。やっぱり気にしていたんだ・・・。

「別に俺はそのこと気にはしていないよ。たしかに寂しかったけど、

シンイチがああ思っちゃうのも無理ないと思う」

「・・・フィディオ・・・ごめん」

「だから謝らなくていいって。・・・シンイチ、イナズマジャパンに会うまでに時間ってあるかな!？」

ちよつと大きな声を出してしまつてシンイチが驚いた顔をした。大きすぎたかな? 暗い雰囲気吹き飛ばそうと思つたんだけど・・・。「まあ、あるけど。・・・皆には会いに来たこと何も言つてないし」「イナズマジャパンの応援しにきたつて事はシンイチも今はサッカーやつてる?」

「やつてる。というか、サッカー部の部員だし」

そうなんだ。・・・良かった。

「じゃあさ、ちよつとだけ付き合つてくれる? 一緒に練習しようよ」「え!？」

シンイチがまたもや驚いたような顔をした。・・・驚くようなこと言つたかな?

「そんな、いいよ。気持ちは嬉しいけど・・・。フィディオはイタリア代表なんだから? 俺なんかじゃ練習相手務まらない」

「そんなことないよ。それに、俺はシンイチとやりたいんだ。せつかく再会できたのに・・・」

「でも・・・」

「それに、マークもいる。彼、今アメリカ代表なんだ。久しぶりにシンイチと会えたら喜ぶと思うよ」

「マークも・・・?」

「うん。テレスはいないけどね。・・・シンイチ?」
気が付いたらシンイチが顔を歪めて俯いていた。

「フィディオも・・・マークも・・・円堂と染岡も・・・皆は国の代表選手になつていてるつていうのに・・・俺はそれどころか、部活のレギュラーにすらなれていないのに・・・」

「・・・シンイチ・・・」

どうやらシンイチは部活のレギュラーからも落ちてしまつてい

しい。交代要員としてベンチにはいるけど、試合にでるのは滅多に無いらしい。

「あれからいつごろかまでは俺も知らないけど、シンイチは長い間サッカーをしてなかったんだからしょうがないよ」

「しょうがない？」

「うん、もちろんシンイチ自身の問題だからそんなのは周りには関係ないけど」

そう。今まで練習してなかったんだから当たり前、と周りに言われればそうだし、実力がなかっただけ、と言われても仕方ない。でも、シンイチは才能がないわけじゃないと思う。少なくとも一緒にやっていた時は俺やマーク同様上手かった方だ。努力すれば上手になるはずだ。なにより、楽しそうにサッカーをやっていたシンイチにサッカーのことで暗い顔をしてほしくない。

「・・・そうだ！じゃあシンイチは特訓のつもりできたらいいよ」「え？」

「シンイチはサッカーの技術向上ができる。俺とマークは技術向上もあるしシンイチと練習ができて嬉しい。一石二鳥だろ？それともシンイチは俺達と練習するのは嫌？」

そういうと、シンイチは渋々といった感じで「わかったよ」と頷いた。

「よし決まりだ！早速マークに連絡いれとくよ」

そうして俺は携帯を取り出し、マークに電話をかけた。サプライズで驚かせてもいいけど、やっぱり早く知らせたかったんだ。

ベンチに座っていると突然振動が伝わってきた。何かと思っているとマークの鞆から音が聞こえてくる。携帯の音だ。

「マーク。電話がかかってきてるよ」

「ん？ああ、わかった」

そう言ってマークはタオルで顔を拭きながらこちらにやってくる。俺達は今、サッカーの練習をしている。どうやらマークとディランはよく二人で練習しているらしい。また、アルゼンチン代表のテレス・トルーエヤイタリア代表のフィディオ・アルデナともちよくちよく会って一緒に練習しているらしい。これは驚いたんだけど、なんとマークはその二人と古くからの友達とのこと。アメリカ代表とアルゼンチン・イタリア代表が友達というのは、世界は広いようで狭いと思う。

「はい、マー……っあ」

マークの携帯を取り出し、マークに渡そうと手を伸ばした所に横から手が伸びてきてとられてしまった。

「ディラン……」

「何をやっている……」

「おう、フィディオからだネ！」

俺とマークの呆れたような視線を無視してディランは携帯の通話ボタンを押した。

「フィディオかい？ノンノン ミーさ、ディランだヨ！って、あ」
ディランがそのまま会話を続けようとしてる所でマークが強引に携帯を取り返した。

「フィディオか？すまないな、ディランが勝手にでてしまったんだ」
「ミーともたまにはフィディオと喋らせてくれてもいいと思うヨ？」

ちなみにディランはフィディオ達と古くからの知り合い、というわけではなく、マークを通じて二人と知り合ったとのこと。その為、やはりマークとはよく喋り、ディランとはあまり喋らないらしい。あまり喋らない、といってもそれはお喋りのディランからでたぶん結構喋っているのだろうと俺は思う。少なくともさっきのディランの調子からだとは仲が悪いというわけではないだろう。……ディランが一方的に話しかけている、というだけの可能性もありそうだけだ。

「ああ。・・・何？シンイチが？」

そこまで大きく、というわけでもないけれど、マークにしては珍しく、見てすぐにわかるくらいに驚いていた。シンイチって・・・誰だろう？ディランに視線を向けると「ミーもサッカー」とでもいうように肩を竦めた。名前からして日本人だと思う。勿論、シンイチという外国人がいてもおかしくはない。ちなみに俺と同じ雷門中サッカー部にも半田真一という人物がいる。同じ名前をアメリカ代表とイタリア代表の会話からきこえてくるなんて本当に世界は狭い。「そうか。あいつも今はサッカーをしているのか」

今度は安堵したような、嬉しそうな顔をしている。マークと出会って長くはないけれど、彼がここまで表情を変えるのは珍しいな、と思う。たぶん、彼が表情を変えるくらいなのだから普通の人というところ？え！？マジ！？信じられね〜！！」と飛び上がっているくらいだろう・・・とまでは言わない。マークもそこまで仏頂面じゃないでも、それでもやはり彼がここまで表情を変えたのを何度も見えない俺にとっては新鮮だった。

「わかった。じゃああいつに伝えといてくれ。会うのを楽しみにしている、と。・・・いや、実際に話すのは会った時の楽しみにとっておく。ああ」

そういうマークは本当に楽しみにしていそうだ。

「・・・そうだ。こちらも一人追加で一緒に練習する。イチノセだ。もちろん、そのイチノセさ。何度も確認するな。フィールドの魔術師と呼ばれているイチノセカズヤだ」

どうやら今度は俺の事を話しているらしい。フィールドの魔術師、というのは世界で使われているらしい俺の二つ名だ。別に嫌いではない。豪園寺や鬼道なんかは嫌がりそうだ。

「イチノセ、フィデオから。フィールドの魔術師がどんなプレイを見せてくれるか楽しみにしている、とのことだ」

「え？うーん、じゃあ俺からも・・・」

ちなみに電話相手のフィデオも白い流星と呼ばれているヨーロッパ

パを代表するエースストライカーだ。そんな彼からプレイを楽しみにしている、といわれると嬉しくなる。

「白い流星がどんな華麗なドリブルを見せてくれるか楽しみにしている、と伝えといて」

「フィディオ、イチノセが白い流星がどんな華麗なドリブルを見せてくれるか楽しみにしている、とのことだ。ああ。大丈夫だ。お前ほどのプレイヤーならイチノセの期待を裏切らないだろう。フィディオはもう少し謙虚さをなくしたほうがいいぞ。そこがお前の良い所だが」

マークの言葉からしてフィディオが「フィールドの魔術師の期待に応えられるといいんだけど」みたいなことを言ったのだろうか。それこそ逆だ。俺だってそこまで凄くない。世界では俺よりもフィディオの方が有名だと思う。そんな彼の期待に不安がないわけではないけど、それ以上にやはり嬉しい。

「わかった。俺達は既についてるから。道中事故とかに巻き込まれないようにしろよ。ああ、じゃあな」

そういつてマークは携帯を閉じた。

「フィディオ達ももうすぐ来るらしい。それと、向こうにも予定に入ってなかったが一人メンバーがいるそうだ」

「さっき言っていたシンイチって人かい？」

「ああ」

そう頷く彼の表情は先ほどと同じく嬉しそうだ。一体誰なんだろう？・・・と思っているとディランが代わりに尋ねてくれた。

「ミーも知らないけど、そのシンイチって誰なんだい？もしかしてミーからそのシンイチに変えようとかそんな考えが!？」

「バカ言つな。そんな気は毛頭ない。・・・シンイチはフィディオの従兄弟だ。テレスも含めて昔は四人でよくサッカーをしていた」

「へ」

「だが、ある時・・・ちょうど俺たちが別れる少し前からある事をキツカケにシンイチはサッカーをやめていたんだが・・・どうやら

今は再びサッカーをやっているらしい」

マークは一瞬悲しそうな表情をしたけど、その後また嬉しそうな表情をする。何度もいうけど、彼がここまで表情をこころ変えるのは珍しい。

「イナズマジャパンを応援しにきたそうだが、たまたまフィディオを再会したらしい」

「・・・え？」

イナズマジャパンを応援しに来た、シンイチという名の人物？

「マーク、シンイチって・・・日本人？」

「ああ・・・もしかして知り合いか？」

イナズマジャパンを応援しに来た、シンイチという名の日本人。俺はその人物に心当たりがある。というよりも、シンイチときいて頭に浮かんだのが彼だ。その時はそんなことあるはずない、というよりもその可能性を考えもしなかったけど・・・。

「たぶん・・・シンイチのフルネームって・・・半田真一？」

「そうだ。凄いな、イチノセとも知り合いだったのか」

そういうマークは嬉しそうだ。けど、俺にとっては・・・。別に半田が嫌いというわけではない。苦手でもない。仲が悪いわけでもない。俺はアメリカ代表入りしてから、イナズマジャパン・・・円堂たちといずれ敵として再会する事を覚悟はしていたけど・・・こんなに早く、しかも全く予想外の半田と出会うとは思ってもしなかった。無論、アメリカ代表になったことに後悔はない。円堂達と戦えることに嬉しさもある。けど、やっぱり彼らに対して後ろめたさはある。

「ということはあいつもイチノセと同じ雷門中にいるのか？世界は狭いな」

本当に世界は狭い・・・そう思った。

半田とフィディオと一之瀬（後書き）

二話目となりました。どうだったでしょうか？キャラについてはあくまで作者が思うキャラとなっております。もし、「こいつはこんなキャラじゃねえ！」というのがありましたら、ご了承くださいと幸いです。

それでは感想、意見等お待ちしております！次話で再会できることを願って……さよなら！

ユニコーンとの交流

「お〜い、マーク、ディラン！」

ファイディオが歩きながら大声を出して手を振っている。その先には白いユニフォームを着た3人の人物がいる。そのうちの二人は黄土色の髪をした人物とオールバックにしたブロンドの髪をした人物。

「ヤ〜、ファイディオ！久しぶりだね！」

「久しぶりだな、ファイディオ。それと・・・」

マークがこちらを向いて少しだけ微笑んだ。

「シンイチも。6年ぶりだな」

「そんなになるかな・・・久しぶり、マーク。あまり変わらないな」
マークは6年前はクールで感情を強く表に出さない方だったけど、今も見た感じ変わらなさそうだ。

「変わらないのはシンイチだ。見たらすぐにわかったぞ」

「・・・どうせ俺は昔から変わらず地味な顔だよ・・・」

性格の方は二人とも変わってなさそうだけど、顔は・・・正直に言うとかッコいい。少し悔しい。

「誰もそんなことは言っていないぞ」

マークが苦笑しながら言う。それはわかっていて自分がネガティブなだけなのだというのもわかっているけど、思ってしまうものは思ってしまう。

「そうヨ！かつこ悪いよりはずっと良いネ！」

「ディラン、それは励ましになっていないぞ」

「俺の時もそうだったけど、ディランは初対面の人も気軽に話すよね」

「それだミーの取り柄だからネ！」

「たまにやかましいと思う時があるがな・・・いや、結構あるな」

「ノー！それはヒドイネ、マーク！」

「俺はその軽いノリが好きだよ。こっちも楽しい気分になってくる

し」

「さすがはフィディオネ！冷たいキャプテンとはチガ」でも、静かにしてほしいと思う時はやっぱり時々あるかな」フィディオもヒドイネー！」

3人は盛り上がっている。フィディオとマークは小さい時の友達だから微笑ましくあるけど、その輪の中に俺は・・・正直入りづらい。

「半田・・・」

そんなことを思っていると隣から呼ばれて振り向く。そこには・・・

「一之瀬・・・久しぶりだな」

「うん、そうだね。正直、こんな形で再会するなんて思ってたよ」

そういつて一之瀬は苦笑した。そりゃそうだろう。一之瀬は俺がイナズマジヤパンに入っていない事を知っている。日本から遠く離れた土地で、しかもまだF.F.I本戦が始まっていないこの時期に、イナズマジヤパンメンバーと会うだけでも予想外だろうに、本来日本にいるはずの俺と再会したんだから。

「俺も・・・と、アメリカ代表入り、おめでとう。聞いたときは驚いた」

「うん、ありがとう。まさか半田がイタリア代表副キャプテンのフィディオと、アメリカ代表キャプテンのマークと知り合いだったとは俺も驚いたよ」

「俺からしてみれば、友達だったフィディオとマークが国の代表、しかもキャプテンと副キャプテンについていて、その内の一つのチームに中学の知り合いがいるってことに、世界は狭いな」と思った。そして、俺がいた雷門中のサッカー部キャプテンであった円堂が、日本代表のキャプテンに選ばれて、円堂以外にも染岡をはじめとした雷門中メンバーがイナズマジヤパンにはいる。現実は何が起きるかわからない。

「あ、そうそう」

いつからきいていたのか、いつの間にか隣にいたフィディオが口を

開いた。

「俺とマークだけじゃないよ。テレスも、アルゼンチン代表のキャプテンだ」

「テレスも!？」

「ということとは、小さいころの4人組の中でも、雷門中初期メンバーの中でも、俺だけが国の代表入りをしていないことに……ってまた暗い方向に考えてしまってるな。」

「テレスは昔からガタイが良かったからな。その体を使った守備は世界で見てもトップクラスだろう。特にアイアンウォールは、破れる奴はそういない」

「それをいうなら君とディランのコンビネーションも大したものさ。たとえテレスでも、君達を防ぎきるのは難しいと思う」

「それこそ、フィデオがスゴイネ。ユーのドリブルに対処できる選手はテレス含めてもそういないヨ!」

「……皆、凄いな……」

皆が皆、世界でもトップクラスの実力者なんだ。そして、一之瀬も今はその内の一人。ここにいるメンバーで、俺だけが雲の下の存在だ。

「……シンイチ、俺はお前も凄い選手になれると思っているぞ」

「……え?」

驚いて、マークの顔を見ると真剣な表情で俺を見ていた。

「俺もそう思う」

隣ではフィデオも頷いていた。……世界トップクラスの実力を持つフィデオ達がいう凄い選手に……俺が……?

「イチノセは最近のシンイチのプレイを知ってるんだろ?どうだった?」

「え?うくん、そうだな……」

一之瀬が手を顎に当て考えている。過去を思い出しながら俺の良かったところを探しているんだろう。

「半田は……秀でた部分があったわけでもないけど、駄目な部分

もなく・・・これといった必殺技を持つてるわけじゃないけど、標準以上には上手かったんじゃないかな・・・？」

標準っていう基準はどこなんだろう、という突っ込みはやめておいた。

「日本でいう、バランス型、器用貧乏っていうやつかな・・・？」

隣では、フィディオが真剣に考えながら悪気はないなるうけど俺が気にしていることを言っていた。

「・・・うん。このまま喋っていてもなんだし、練習しよう」

「そうだな。形式はいつも通りで行くか？」

「俺としては、せつかくシンイチがいるんだから一緒に戦いたいな」

「チーム戦か？構わないが、5人だから一人余るぞ」

「うーん・・・マークとディランは確定で、俺はシンイチと組みたいし・・・イチノセはマーク達につけばいいんじゃないかな」

「え？」

驚いた俺はフィディオを見してみるけど、「冗談を言ってる顔ではない。フィディオも凄い選手かもしれないけど（というか世界で異名を持つほどだから実際に凄い選手だ）、マークやディランだって世界トップクラスのはずで、イチノセもそうだ。その3人に対して、平凡（一之瀬曰く、標準より上らしいけど）な俺と二人だけで戦うなんて無謀でしかないと思う。練習ではあるけれど・・・」

「シンイチと二人だけで戦うのか？随分な自信だな。シンイチも凄い選手なれる、とは俺も言ったが少なくとも今はそんなに強くないんだろう？」

マークも俺と同じ思いだったみたいだ。・・・でも、本人がいる所で言わないでほしい・・・昔もマークは、アメリカ人だからなのか、別に冷たい性格ではないけど、他人の気にしてる所もズバツと言う時があった。長所でもあるけど。

「別にそんなことはないよ。ただ単に、イチノセはマーク達と同じユニコーンメンバーで、俺がイチノセのプレイを敵として見ていたかったから、っていう理由だけだ」

「じゃあそうさせてもらおうよ。俺も、白い流星のプレイを見てみたかったしね」

フィディオとマーク達はちよくちよく会っていたらしいけど、一之瀬とは今回が初めてらしい。そういう意味では、フィディオと一之瀬が対決する構図も当たり前といえは当たり前だ。

「まあいいか。試合でもないしな」

「フィディオ！テカゲンはできないけどいいかい？」

「もちろん、本気でできてくれよ。じゃないと練習の意味がない」

そっぴいなながらフィディオ達は小さいグラウンドに向かっていく。

俺も参加しないといけない。もちろん、皆と一緒にサッカーができるという喜びや楽しみはあるけど、世界レベルの練習に俺がついていけるか心配だった。

予想していた通り、俺は散々な結果だった。フィディオはやっぱり凄くて相手のスライディングをバク転でかわしたり、相手からボールを奪ったりで、こっちがとった点はフィディオが一人でとったよくなものだ。対して俺は、フィディオがこっちにパスをくれてもすぐにマーク達にボールをとられて相手に点をやる機会を与えているだけだったように思う。また、マークとディランのコンビネーションは抜群で、どっちかをマークしていると気づかない場所にもう一人がいてそこにパスがだされて突破されたりと俺はただ翻弄されていた。フィディオも頑張っていたけど、コンビネーションが成立した時はさすがに対応しきれていなかった。そして一之瀬もやっぱり凄くて、特にボールコントロールが飛びぬけていた。それ以外も凄いけど、そこだけはこの中で一番だと思う。

「参ったよ。やっぱり二人のコンビネーションは凄いな。イチノセのボールコントロールも凄かったし、さすがはフィールドの魔術師だ」

「フィディオこそ、白い流星と呼ばれただけあるよ。正直、半田が

もつと強かつたら負けてたかもしれない」

「ああ。しかし、シンイチも後半は結構動けてたな」

そう。これは俺も、というよりたぶん俺が一番驚いたことだけど、練習の後半からは、マークとディランにもある程度対応できるようになったし、一之瀬ともマンツーマンなら、ボールをとれたり、逆にかわすこともできたりした。それでも、まだまだなことに変わりはないんだけど。

「フィディオと一緒にやっていたからかもしれないね。母さんが違うとはいえ、兄弟だったんだろ？」

「「え？」」

一之瀬の言葉に俺とフィディオは顔を見合わせた。いや、実際そうかもしれない。フィディオと練習していて、なんといいたらいいかわからないけど、体が軽いというか、いつもより動ける気がした。また、いつも以上に楽しかった、とも思う。

「ブラザーパワーというやつネ！」

「何だそれは・・・」

よくわからないことを言うディランをマークが呆れた表情で見ているけど・・・兄弟パワーか。そうかもしれない。・・・って、なに俺は恥ずかしいことを考えているんだ。

「シンイチ、楽しかった？」

「あ、ああ。楽しかった・・・うん、楽しかった」

「そう。なら良かった」

俺がさっきの練習時間をかみしめているとフィディオがこちらを見て優しく微笑んだ。・・・ちょっと照れくさい。

「と、もうこんな時間だな。ディラン、帰るぞ。イチノセも」

「え？そうなんだ」

「オ、もうそんな時間！？早く帰らないと監督に怒られるネ！」

「というわけだから、フィディオ、シンイチ、今回はこれでサヨナラだ。次出会える時を待っているぞ」

「ああ。マーク達とは、次はもう大会で、かな」

「そうだね。悔いが残らないようお互いに頑張ろう」

「じゃあね、二人とも！グッバイ！」

そしてマークとディランが去ろうと俺達の横を通り過ぎていく。ディランは肩にポンと手を叩いてきただけだったけど、マークは通り過ぎる際に小さく俺の耳元でささやいた。

「お前がサッカーやっていてくれて嬉しかったぞ」

「・・・マーク・・・」

俺は去っていくマークの背中を見つめながら心の中で「ありがとう」と告げた。たぶん、選手でもない俺がマーク達と会うことは大会後までないだろう。そしてその後は、俺は日本、マーク達はアメリカに帰るはずだから会う機会がない。少しの間だったけど、昔の友達に再会できて良かったと思う。

「・・・半田・・・」

と、感傷に浸っている間に声かけられて振り向くと、一之瀬がまだそこにいた。

「一之瀬は帰らないのか？」

「うん、帰るよ。だけど、半田に頼みたいことがあるんだ」

「頼みたいこと？」

「うん。半田はイナズマジャパンの応援に来たんだよね。そしたらさ、彼らに・・・円堂達に伝えといてよ。『裏切るような形になっちゃってごめん。でも、俺はアメリカをサッカー大国にする為にユニコーンで戦う。円堂達と当たっても油断はしないし、本気で勝ちに行く。だから、円堂達も本気で戦ってほしい』って」

「わかった、伝えとく。でも、たぶんわざわざ言わなくても円堂達はずっと本気だし、一之瀬の事も責めたりはしてないぞ」

「うん、わかってる。伝えときたかっただけだから・・・じゃあね！」

二本の指を立て笑ってから、一之瀬はマーク達の所に駆けていく。

「よし！俺も帰るとするよ」

「じゃあ、フィディオともここでお別れだな」

今になって寂しい気持ちが出てきた。昔の友人たちと突然再会して、すぐに別れないといけない。正直に言つとマークとだつてもう少しいたかつた。

「そうなるね。シンイチと久しぶりにサッカー出来て楽しかつたよ」「うん、俺も。凄く楽しかつた・・・じゃあな」

そういつて俺は踵を返し、歩き出す。早くしないと、『もつとフィディオと遊んで一緒にサッカーしたい』という気持ちが強くなつてしまつから。

「・・・あのさ・・・」

後ろから声をかけられ、振り向く。フィディオは真剣な表情で俺の目を見て、黙つていたけど、少ししてから「うん」と頷いて、決意を込めてこう告げた。

「・・・俺からの頼みも、きいてくれないかな・・・？」

ユニコーンとの交流（後書き）

3話目となりました。どうでしたでしょうか？楽しんでいただけたなら幸いです。この後の展開は、どうなるのか？わかってしまっている方もいるかもしれませんが、楽しみにお待ちいただけたら、と思います。

感想、意見等お待ちしております。また、もし誤字脱字などがありましたら報告してくださると嬉しいです。では！

INイナズマジャパン

イナズマジャパンがいるであろう場所を教えてもらってからフィデイオと別れ、俺は円堂達の元へとたどり着いた。

「豪園寺さんの方が凄いに決まっています！」

「円堂さんの方が凄いや！」

「お前達、少しは落ち着け」

「「鬼道さんは黙っててください！！！」」

「・・・すまない・・・」

日本メンバーの合宿所に入ると何やら騒がしかった。入口ホールには、3人いた。一人は一つ縛りのドレッドヘアに、ゴーグルをした鬼道。元々は帝国学園という所にいたけど、その監督だった影山を裏切り雷門中に入部した。最初は反対していたけど、ちゃんと俺達雷門中を仲間として大事にしてくれることがわかったし、実力も十分で（というより、俺よりも遥かに上手だ）、天才MFとして今では雷門中になくはない存在だ。きっとイナズマジャパンでも中心的存在になっているんだろうと思う。もう一人は俺も面識は多くないけど、たしか立向居という奴だ。黄土色の髪をした、一つ年下の大人しい奴。円堂の憧れを通り越した熱烈なファンで初めて出会った時なんかは円堂と握手した手を「一生洗いません！」と言っていた。真面目で素直、誰からも好かれそうな社交性の持ち主だけど、同時に負けん気や根性も持っている。円堂のゴッドハンドをビデオと自己流特訓で覚えてしまってくらいだし、才能もあるんだろう。最後の一人は・・・誰だろう？紺色の短髪をしている。見たことがない奴だ。イナズマジャパン結成時に仲間になったという宇都宮虎丸か飛鷹征矢という奴だろうか？

「立向居さんなんかじゃ豪園寺さんのシュート止められません！」

「君こそ、円堂さんからゴールを奪えないだろ！」

「・・・もう夜だぞ・・・」

どうやら、立向居と誰かが円堂と豪園寺の事でどっちが凄いか言い争っているらしい。鬼道は止めようとして失敗したみたいだ。それにしても、豪園寺も人気あるんだな。

「ん？」

鬼道が俺に気づいてこちらに振り向く。

「半田か？どうしてここに？」

「どうしてって・・・応援しに来たに決まってるだろ」

駆け寄ってきた鬼道に俺は苦笑して答えた。

「それもそうだが・・・それならそうと連絡をくれればいいだろうに」

「お前たちが本戦出場決めたってきて、いてもたってもいられなかったんだ。・・・おかげで迷ったけど」

「・・・半田も大概のサッカーバカだな。円堂にあてられたのか？」

「俺も驚いてるよ」

俺達がそんな会話をしている最中も例のお二人は「円堂さん！」「豪園寺さん！」と言い合いを続けている。

「まだ続けてたのか？二人は」

「本当に、立向居君も宇都宮君も円堂君と豪園寺君が好きだね」

今度は奥から二人やってきた。水色のポニーテールをして風丸。同じ雷門中部員で、俺と同じようにエイリア石に取り込まれダークエンペラーズに入ったこともある。初期部員ではない（というより、元々は陸上部員だった）けど、円堂とは俺や染岡よりも古い付き合いで相談役にもなっていたらしい。真面目で面倒見が良く、態度も比較的に穏やかで、雷門中において円堂や鬼道に次ぐ司令塔的存在だった。もう一人はこれまた面識は多くないけど、たしかエイリア学園の基山ヒロトだ。色白の肌に、赤色の髪をしている。一見穏やかで礼儀正しい口調だが、どこか冷めた雰囲気を持っていて、面識もあまりないからこいつのことを俺はよく知らないが、あの戦い以降、変わったみたいだ。ちなみに、立向居と言っている奴は宇都宮という奴だった。

「・・・半田じゃないか！どうしてって・・・応援に決まってるか。よく来てくれたな！」

「・・・誰だったかな？」

風丸は笑顔で俺を迎えてくれたけど、基山は俺の事をよくわからないらしい。まあ、しょうがないだろう。そもそも俺は見た目のサッカーの実力も平凡で、こいつとは戦ってすらいない。円堂もわざわざ俺の事を話にきりださないだろうし。

「久しぶり、風丸。イナズマジャパンはどんな感じなんだ？」

「正直凄いな。俺がちゃんとしていけるかという不安が、少しはある。・・・心配するなよ？もうエイリア石のようないかさまのものに惑わされたりしない。俺の俺自身の力でイナズマジャパンの皆と世界を目指す」

そっとう風丸の目は、本人が言うように揺らぐことはないだろう決意が宿っていた。

「ああ。・・・何もできないけど、応援してるよ」

「そんなことはない。来てくれただけでも嬉しいさ」

その言葉に俺は嬉しくなる。俺も、いらない存在じゃないと思えるから。だけど・・・

「おや、吹雪君と豪炎寺君、それに飛鷹君も帰ってきたみたいだね」

「ただいま。新必殺技もなかなか上手くいかないね。・・・あれ？」

「・・・半田？」

「誰だ？」

吹雪の言葉から察するに、新しい必殺技の特訓にでも行っていたらしい彼と、豪炎寺、それと飛鷹・・・つまりイナズマジャパン結成時の新しい仲間と思われる奴が帰ってきた。一人目、吹雪は薄紫色の髪とタレ目の青い瞳が特徴の人物だ。こいつもそこまで面識は多くないけど、その穏やかな雰囲気とルックスから、女子にはかなりモテているらしい。かつては弟だとかいう、好戦的な『アツヤ』なる人格と二つの人格を持った二重人格者だったが、今ではそのアツヤとも融合して完璧な存在になった。今では豪炎寺と並ぶエース

ストライカーとして活躍している。もう一人、豪炎寺は切れ長の目に、白に近い色をした稲妻型の眉毛とツンツンに逆立った髪が特徴で、雷門には転校して入ってきており初期部員ではない。鬼道と同じく、俺は少し反発していたけど、こいつもサッカーに対する情熱は円堂と同じくらい持っている奴だ。雷門中にとつてなくてはならないエースストライカーとなっている。非常に妹思いだが、正直シスコンと言ってもいいと思う。そして飛鷹・・・新しい仲間の一人は赤紫色で左右が鳥の羽のように広がったリーゼントヘアをしている。見た感じは不良っぽく感じるんだけど大丈夫だろうか？

「豪炎寺も久しぶり。・・・吹雪と飛鷹って奴との新必殺技でも考えてたのか？」

「いや、飛鷹は付き合ってもらっていただけだ」

「炎と氷の融合技ってのがなかなかね。殆ど相殺してしまってただけのキックになっちゃって、飛鷹を破ることができなかったよ」

「飛鷹って、FWじゃないのか？それだったら壁山とか、いつそ円堂当たりに頼んだ方が良かったんじゃない？」

「飛鷹はDFだ」

「え！？」

俺は驚いて飛鷹を見てみた。見た目は完全に不良っぽいから、攻撃的なイメージがあってFWと決めつけちゃってたけど・・・DFだったのか。そんな俺の思考を読み取ったのか、彼は俺から視線を逸らして、

「どうせ、俺は不良さ・・・いや、番長だったけど・・・」
と拗ねた(?)。

「飛鷹は元々不良達の番長で、『蹴りのトビー』と呼ばれる程の存在だったそうだが、響監督に出会い、改心したそうだし隣で風丸が説明してくれた。

「まあたしかに見た目は不良そのものだが・・・あいつの必殺技は凄いで。この前まで素人だったから実力は心許ない部分もあるが、それ以上にあの必殺技が補っているな。それに、隠れて円堂達と特

訓してるらしく成長も早い」

「凄いな」

この前まで素人で代表入り。俺なんかブランクがあつたとしても経験者で部活のレギュラーにすらなれなかったのに。まあ、そんな奴は山ほどいるんだろうけど・・・

「・・・なんで秘密にしているのに知ってるんだよ」

「そんなの何となくわかるさ」

そして代表メンバーとして認められているのは、隠れて特訓しているからだろう。もちろん、それでも選ばれない奴も多いだろうけど、そこはやはり才能や運の違いだろう。

「ちなみに、あんなナリだが、弟子？の不良達からは大分尊敬されている。逆に妬みも持っている連中もいたけどな」

「あんなナリってなんだよ」

「豪炎寺さん！」

と、突然もう一人の新メンバーである宇都宮が豪炎寺の方へと駆け寄ってきて、話に割り込んできた。割り込むというよりも他の話題を吹き飛ばす勢いでやってきた。

「立向居さん、円堂さんの方が凄いつていうんですよ！豪炎寺さんの事わかってない！」

「・・・お前は俺のファンか・・・」

どうやら立向居とはまだ続いていたらしい。そんな宇都宮の様子に豪炎寺は呆れた様子で言った。

「お前は俺を越すんだろ？そんな調子で大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ！尊敬はしていますけど、絶対に豪炎寺さんからイナズマジヤパンエースストライカーの座を奪ってやりませう！」

「ふっ・・・やれるものならやってみる」

あの豪炎寺が微笑んだ！・・・と驚くのは失礼だな。それにしてもあの二人は何か師弟っぽく感じる。

「立向居もだが、虎丸の豪炎寺熱も本当に大したものだな。最初はあいつも円堂ファンかと最初は思ったんだが」

「え？そうなのか？・・・あと、虎丸って宇都宮のことか？」

見る限り、どう見ても豪炎寺ファンといった感じで、円堂に対してはむしろそんなに尊敬してなさそうな言動すらしている。

「そうか。半田は知らないな。虎丸・・・宇都宮のことだが、あいつ、ああみえて最初は大人しい性格だったんだ」

「当初は円堂に対してストーカーのような行動をとっていたから円堂のファンかと思っていただけだが、実は・・・という感じでな」

鬼道も説明に加わる。立向居と宇都宮の争いが終わって、宇都宮がこっちに来たので彼もこっちに來たらしい。

「おとなしい、というより活発で生意気そうな印象だけど」

「そうだ。嫌な言い方をすればそれがあいつの本性で会った時は、過去をひきずって大人しくしていたんだろう」

「過去？」

「まあ、よくあることだ。あいつは才能に恵まれ、小学6年だといふのに俺達と同レベル、あるいはそれ以上の实力を持っている。そうになると、小学チームの中ではあいつばかりが活躍してしまい、周りから妬みを買ってしまったらしい」

「そんなことがあったのか・・・ん？」

「なんか過去の出来事以外で驚きの事実を知ったような気が・・・」

「鬼道、さっき小学6年って言ったのか？」

「ああ、言ったな」

「なんでそいつが代表メンバーの中に？」

「半田は知らないのか。日本では中学生じゃないとFFIに出れないが、国際ルールとしては各国の都合を踏まえ、FFI参加資格が15歳以下となっている」

「そうなのか」

それにしても小学6年生でFFI代表と同レベルか。まだまだ俺の知らないような奴も多いな。

「それで、そんな過去のせいで性格が・・・？」

「性格というよりもプレイだな。試合におけるチャンスは全て他の

選手に渡っていた。その影響で、あるいは実力を隠そうという思いから、大人しくなってしまうたんだろう」

「ま、それも豪炎寺の激励で直ったけどな」

「ああ。性格が変わりすぎだが・・・」

「鬼道が言うなよ」

「なに？」

たしかに。宇都宮が以前はどんな状態だったのか知らないけど、鬼道も帝国学園にいた頃と比べると性格が大分変っている。

「それも、影山の呪縛から解放されたってことだよな！」

後ろから突然声が聞こえ、振り返るとそこには、円堂がいた。隣には、壁山と染岡もいる。

「円堂・・・壁山・・・染岡・・・」

「そうだな。お前達のおかげだ。感謝している」

「それはこつちのセリフだけ！お前のおかげで俺達はこちらまでこれたんだからな！」

円堂は笑顔でそういうけれど、円堂がいなければ、俺はサッカーを再びやることもなく、そしたら皆やファイデオ達とも会うことがなかった。俺だけじゃなく、本来のサッカーをやるようになった鬼道とか、円堂に助けられた奴は多いと思う。その明るさ、優しさ、負けん気、向上心に引つ張られて俺達雷門中は日本一となった。そして今、円堂は新しい仲間を連れて、夢の舞台であるFFI優勝を目指している。一之瀬も目指しているし、ファイデオやマークも世界一を目指している。そして俺も・・・。

「それと・・・半田、よく来てくれたな！嬉しいぜ！」

「円堂・・・ああ」

円堂が笑顔でこちらに向いて手を差し伸べてきた。俺も手を差し出すとした所で・・・

「半田さ～～～ん！！会いたかったす～～～！！！」

「えっ・・・ちよっ・・・かべや・・・!?」

間に割り込んできた壁山が飛びついてきた。壁山はまさしくDFの

為に生まれしてきたかのような巨漢だ。明るくお調子者でムードメーカー、対照的に（見た目とは裏腹に）弱気なところはあるけど、凄く頑張っていると思う。体重は見た目通り。加減していないのか、日本代表の特訓で強くなったのか、雷門中として活動していた頃よりも強い勢いで飛びつかれ俺はそのまま押し倒された。・・・よく潰されなかったと思う（とはいっても、一瞬気を失いかけた）

「久しぶりっす！少林寺達は来ていないんっすか？」

「あ、ああ。俺だけ・・・だけど・・・壁山・・・」

「なんすか？」

ちなみに、こいつはこれまた見た目とは裏腹に（関係ないか？）純粹だ。そんな奴の瞳に見つめられて「重い」という言葉がでそうになるのをこらえてしまつて、俺は苦笑した。

「まったく・・・日本代表メンバーになつても、変わらないな」

「こいつが変わることなんてそうそうないだろ」

染岡がそう言いながら、壁山を俺から引き離れた。正直、助かった。吸える空気の量が数倍になったと思う。

「染岡、ありがとう。それと久しぶり。お前も変わらないな」

「お前もそうだろうが。とはいっても、たいていの奴が変わつてないけどな」

染岡はピンク色の坊主頭で強面の顔をしており、見た目は飛鷹以上に怖い。見た目同様、口も悪いけど実際は情に厚く筋の通らないことが嫌いで、意外と面倒見が良い。漫画とかでいえば仁に篤い人間と言われるかもしれない。・・・とまあ、それはおいといて、何度か説明したとおり（俺は誰に説明してるんだろっ？）染岡は円堂、俺と同じく雷門中サッカー部最古参メンバーだ。こう見えて、こいつも豪炎寺や吹雪にエースの座を追われ、悩んでいた時期もあった。そして俺や風丸同様、エイリア石に取り込まれてしまった。だけど、今では遅れながらもイナズマジャパン入りを果たしている。誇らしくもあり、悔しくもある。

「そうだな。円堂も、風丸も、鬼道も豪炎寺も、皆変わらないな」

「だから気にするなよ」

「え？」

「俺達はお前も『イナズマジャパンの一員』だと思ってるからな。
少林寺達も」

「染岡……」

その言葉は凄く嬉しかった。いや、わかっていた。円堂達ならそう思っていてくれるだろうと。でも、やっぱり自信がなかった。凄い皆に俺は認められているのか。だから染岡から言われて嬉しい……
だけ……

「染岡らしくないな」

「あいつならそう思うだろうと思ったただだ。俺も似合わない事言
ったとは思ったが……」

染岡は円堂を見ながら言った。少し照れているようにも見える。円堂は、立向居が戻ってきたらしく彼の話を聞いている。例のごとくガチガチになって上手く喋れてない立向居に、円堂は笑いながら対応している。

「……？」

円堂の顔に少し違和感が残った。さっき、鬼道や俺に向けた笑顔とは何かが違う。とはいっても、何が違うかわからない。たぶん気のせいだろう。

それから少しして、皆はまたバラバラになった。もう夜だし、寝る奴もいるだろう。中にはまだ練習する気なのか、外に出ていくやつもいた。そんな中、俺は円堂を外に呼び出した。一之瀬の伝言を伝えるところと思っただから。

「どうしたんだ半田？あ、これ、夜冷えるだろ、コーヒーだ」

隣に並んだ円堂がコーヒーを渡してきた。寒い、とはいわないけど、

夜となるとそこそこ冷えてきて、コーヒーの暖かさが気持ちよかつた。

「サンキュー」

「ま、風丸からだけどな」

「だろうと思った」

苦笑して言う円堂に俺も苦笑して答える。風丸はこういう気遣いが得意だ。

「俺、ここに来る前に一之瀬と会ったんだ」

「え!？」

円堂が驚いてこちらを見る。フィディオやマーク達と出会ったことは言わない。別に昔の友達というのを言ってもいいのに、あるいは言わなくてもいいのに、何とな、言いづらかった……。

「一之瀬どうしてた!? 元気にしてたか!？」

「……円堂らしいな」

なぜアメリカに行ったのか、とか気になることはあるだろうに、体調から訪ねてくるあたり円堂らしいと思った。

「どういう意味だよ？」

「なんでもない。一之瀬は元気にしてた。一之瀬も円堂達のこと気にしてたな」

「そっか……」

「……訊かないのか？」

「何を？」

「なんでアメリカに行ったのかをきいてないか……とか」

「別にいいさ。あいつが元気でいれば。寂しくはあるけど、あいつはあいつのサッカーしてるんだ。それが影山のようなやり方とかじゃなければそれでいい」

そういう円堂の顔は笑っていて、強がりでもなんでもなく本気でそう言っている顔だ。これは俺が一之瀬にいったことでもあるけど、やっぱり円堂は一之瀬が『裏切った』とかは考えていないんだろう。「そっか……一之瀬から伝言貰っている」

「え？」

「『裏切るような形になってしまっただけで、俺はアメリカをサッカー大国にする為にユニコーンで戦う。円堂達と当たっても油断はしないし、本気で勝ちに行く。だから、円堂達も本気で戦ってほしい』だっただけさ」

「・・・わかった」

円堂はしばらく考えているようだったが、少しして頷いた。一之瀬の決意を受け取るうとしたのかも知れない。

「・・・そういえばさ、半田と一之瀬ってなんか似てないか？」

「は？」

突然の話題展開に一瞬意味が分からなかった。

「ほら、あれやってくれよ。一之瀬の癖。俺だよ、ってやつ」

「・・・なんで俺がやらないといけないんだ」

俺は一之瀬と違ってアメリカ育ちじゃない。そりゃ、イタリア生まれでそこに2年間ほどいたこともあったけど、基本は日本育ちだ。

あんな恥ずかしい・・・じゃない、爽やかな事できない。

「一回だけ！」

なんでこんなに必死なんだ、円堂は。まあいいか・・・

「しょうがないな、一回だけだから・・・」

「ああ！」

「じゃあいくぞ・・・」

えつと・・・たしか、右手を頭の前まで持って行って、親指と人差し指・中指を立てて・・・

「オレだよ」

「・・・ごめん、そんな似てなかったな・・・」

「おい！」

恥ずかしい思いをしただけか俺は！

「・・・と、もういい加減に休まないとな。明日も特訓があるんだ」

「そっか、大変だな」

「FFFI優勝して世界一になるためだからな！」

「そうだよな。世界一になるためには頑張らないと駄目だよな……」

「……半田？」

気づけば円堂が少し首を傾げたまま俺を見ていた。

「なんだよ？」

「いや、なんかあったのかな〜と思ってさ」

「……そんなことないけど」

やはり円堂はこういう所には鋭い。

「……そっか。変なこと言っでごめんな！」

「いや、気にしてないさ」

パツと笑顔になる円堂を見ると心が重たくなる。アメリカに行く時の一之瀬も、こういう気持ちだったんだろうか……。

「それじゃ、俺は応援するしかできないけど、頑張れよ」

「ああ！」

俺が拳を突き出すと円堂も拳を突き出して、コンッと音がなった。次、円堂達と会う時は……。

INイナズマジャパン（後書き）

今回は日本メンバー達との話です。イナズマジャパン紹介話っぽく
なってしまうましたがどうでしょうか。登場人物も一気に増え、よ
りいっそう「このキャラはこんな奴じゃねえ！」とかあるかもしれ
ませんが、見守ってくださいとありがたいです。

感想・意見等お待ちしております！次話にて会えることを期待して・
・では！

INオルフェウス

今、オレ達イタリア代表オルフェウスはイタリアエリアに設けられた練習場に来ている。昨晚、シンイチはイナズマジャパンに挨拶をしにいった。あの事を彼らに伝えてるのか、伝えないのかはわからない。もしかしたら、応じてくれないかもしれない。シンイチにもイナズマジャパンの彼らにも、あの『頼みごと』で悪いことをしたと思う。でも、どうしても・・・

「フィディオ、皆に早く言わないと・・・今日来るんだろ？」

「あ・・・うん。そうだな」

考え事をしてしていると、隣から声をかけられ時間がないことを思い出した。マルコだ。赤紫色のふんわりパーマをしている。パスタ作りが趣味で時々食べさせてもらうことがあるけど、本当に美味しい。プロといってもいいかもしれない。明るい性格でオルフェウスのムードメーカーだ。

「来るかな、シンイチ・・・」

『頼みごと』というのは、シンイチにオルフェウスに入ってもらったことだった。これはオレのただのわがままで。オルフェウスの副キヤプテンでもない、サッカー選手フィディオとしてでもない、シンイチの兄弟であるフィディオ・アルデナとしての私情ではない頼みごと。大勢の人に迷惑をかける行為だ。イナズマジャパンには『仲間』であるシンイチを引き離し、オルフェウスには外来者でしかも実力が実っていないシンイチを仲間にする事、（受け入れてくれたけど）監督にはいろいろな手続きをさせてしまうこと、特にシンイチには『仲間』であつたイナズマジャパンを裏切る形になり、オルフェウスに入っても最初は快く思われないだろう。それでも、オレはシンイチと一緒にサッカーをしたかったんだ。

「シンイチか」。どんな奴なんだろうな」

マルコは空を仰ぎ見て、シンイチがどんな奴かを想像しているらし

い。同室であるマルコには昨晚、シンイチの事を説明している。マルコは驚きはしていたが特に反対ではないらしい。「フィデオはあまりわがまま言わないから、チームに害を与えることじゃないならオレはいいと思うぜ。他の皆はどう思うか知らないけど」とのことらしい。監督にも報告はしたけど、夜になつていたこともあり皆には報告していない。

「・・・よし」

オレは決意を固めて握り拳を作った後、皆の前に出た。

「皆、聞いてくれ！」

オレのその声に、練習したり喋ったりで騒いでいた皆が静かになつてオレの方を見た。

「今日は、皆に報告する事がある。これからいうことは、ただのオレのわがままだ。もちろん、監督には許可をされたけど、皆にもきいてほしい」

皆が不思議そうな顔をしている。そりゃそうだ。皆を集めて報告することが『オレのわがまま』なんだから。

「今日、このオルフェウスに一人、新しいメンバーが来る」

その言葉に皆がいろいろと囁きだす。

「そいつは・・・シンイチ・ハンダ　いや半田真一といった方がいいかな　という奴で、日本人だ」

『日本人』という言葉聞いた瞬間、一気に騒がしくなった。

「フィデオ、『オレのわがまま』って言ったな。なら、そのシンイチという奴をこのオルフェウスにいれるようにしたのはお前か？」

皆の代表という形で、ブラーヂが質問してきた。その巨体から見たとおり、オレ達オルフェウスの守護神、GKだ。

「そうだ。オルフェウスの副キャプテンとしてじゃない、フィデオ・アルデナ個人としての、ただのお願いだ」

「なら、オレは賛成しない。監督が許可したのなら、押し返すことはしないが、オレは歓迎しないぞ。たしかに、オレ達のキャプテンは日本人だが、キャプテンのような奴がそういるとも思えない。ま

してや、オレ達イタリアのチームにこれ以上異邦人は入れたくない」
ブラージはこの今のチームを大事にしている。その思いはたぶんチームだ。その分反対の思いもチーム一だろう。

「たしかに、シンイチはキャプテンと比べると・・・というよりこのチームの中でも明らかに最弱だと思う。だけど、いずれはレギュラーとして申し分ない実力になると、オレは信じてる」

「それはあくまでフィデオの考えだ。会ったこともないオレ達はそうは思えないし、仮にそうだとしても短い間にレギュラーの座を追われるというのも我慢ならねえな」

ラファエレも参加して異議を唱えてきた。元々目つきが悪い彼から、さらに鋭くしたその眼光に睨まれて、一瞬たじろいでしまったけど、オレも引く気は無いんだ。

「それが当たり前の気持ちだと思う。きく側の立場だったら、オレもそう思っていたと思う。だけど・・・認めてくれないか。歓迎してくれ、とまでは言わないけどせめて認めるだけでもしてくれないか」

オレは皆に頭を下げた。こうする以外、オレは方法を知らない。キャプテンとかなら、もっと上手いこといって皆に認めさせるかもしれないけど、オレはそんな話術お持っていない。

「・・・なんでフィデオはそんな真剣なんだ？」

皆の輪から一歩出てアンジェロが訊いてきた。なりは小さいけど、実力はたしかなオルフェウスのれっきとした一員。その眼を見る限り、アンジェロ自身は反対してなさそうだけど、賛成でもないから、チームを崩さないために異議も賛成も言わなかったんだろう。

「シンイチは・・・オレの兄弟だ」

俺が再び顔をあげて説明した。異母兄弟であること。昔は2年間ほどだがよく一緒に遊んでいた事。けど、父の虐待のせいで半田はサッカーをやめてしまい日本に帰ってしまったこと。昨日再会して、サッカーをまたやっていた事・・・ちなみに、俺に異母兄弟がいる事は皆には言っていなかったから、より一層皆は驚いていた。

「さつきも言ったようにこれは、シンイチとサッカーがしたいというオレのわがままだ。だけど、レギュラーに相応しい実力を持つことを信じているのは、鼻屑目とか無しの本心だ」

「皆は戸惑ったような顔をしている。そのつもりはなかったけど、一緒にさせてあげたいのはやまやまだけど』というのを相手に持たす卑怯な手段・・・とは思う。」

「・・・一週間だ」

「え？」

ブラーヂの言葉にオレは驚いた。それはもしかして・・・認めてくれるのか？

「今でも歓迎する気は毛頭ない。だが、一週間だけ見ていてやる」

「・・・いいのか？」

「勘違いするなよ。お前に免じて、だ。それに、一週間経って受け入れれそうにない奴だったら、そいつをやめさせるよう監督に進言するからな」

「わかった。・・・ありがとう！」

一週間でシンイチを皆に認めさせる・・・正直、自信はないけど、なんとしても認めさせてやる。そうしないと、シンイチにももうしわけが立たない。

「それで、そのシンイチって奴はいつくるんだ？」

「実は、いつくるかはわからないんだ。それに、ここまで頼んどいてただけで、本当はこないかもしれない・・・っ」

「遠い所に、こちらに向かって走ってくる茶髪の男の子をみかけた。」

「・・・フィディオ？」

マルコが黙ったオレを見て、そのままオレの視線を追った。

「あいつがシンイチ？」

「ああ」

来てくれたんだ、良かった・・・。

「フィディオ！」

俺はフィディオの所に駆けよった。周囲にはオルフェウスのメンバーだらう人達が集まっていた。

「シンイチ・・・ありがとう、来てくれて」

「お礼を言われる筋合いはないさ。・・・俺もフィディオとサツカーしたいと思っていたし」

自分で言っというてなんだけど、なんだか恥ずかしくてフィディオから顔を逸らした。

「うん。・・・みんな！彼がシンイチだ！」

フィディオに紹介され、一斉に俺に視線を集めるオルフェウスメンバー。・・・緊張する。皆、円堂達同様、イタリアから選ばれた最高レベルのプレイヤーなんだ。

「シンイチ、見ての通り、彼らがオルフェウスのメンバー。キャプテンは今はいないけどたぶんいずれ会えると思う。一気には覚えられないだろうから、とりあえず名前だけ言っっていくよ」

と、フィディオが名前を挙げていくたびにそれぞれ返事をする。マルコっていう奴とアンジェロっていう奴はそこそ好意的な言葉をくれたけど、他の皆はどちらかというところと歓迎していない雰囲気だった。特にブラージっていう人には。覚悟はしていた。俺も豪炎寺や鬼道が雷門中に来た時は反発していたし。だけど・・・やっぱりきついものがあるな。

「ごめん、シンイチ。もうわかってると思うけど・・・」

「いや、覚悟してたから大丈夫さ」

申し訳なさそうに顔を伏せていうフィディオに俺は笑って答えた。たぶん、上手くできていないだろうけど・・・

「それだけじゃないんだ。誘っておいて、酷いとはわかってるんだけど・・・一週間の間に、皆がシンイチを認めなければ、シンイチは・・・」

その後の言葉が続かないのか、そこから先をフィディオは言わなかったけど、何となく予想はついた。

「仕方ないよな・・・」

たぶん、フィディオは嘘をつかず、俺に実力がないことを皆に話している。ましてや、俺は外国人だ。皆の反発心は、豪炎寺たちが来た頃の俺よりも強いはずだ。それでも、一週間でもいさせてくれることを認めてもらえたのだから良かった方・・・と思うことにする。正直に言つと、俺は本心からそう思えるほど前向きじゃない。

「・・・本当にごめん・・・」

フィディオはまだ顔を俯かせていたけど、暫くすると顔をあげて皆の方に向いた。その顔は『キャプテン』としての顔になっている。

「それじゃあ、この話はここまで。わがママをきいてくれてありがとう。早速練習をしよう。シンイチは皆を、皆はシンイチを知らないだろうから、試合形式でやる。チーム分けは・・・」

その後、フィディオによってチームが発表され、試合形式で練習が始まった。

・・・だけど、その練習は散々だった。もちろん、まともに出来たとしても皆には対抗できなかったと思う。それに加え、俺はボールを持たせてもらえなかった。フィディオと同じチームだったから、フィディオは俺にボールを渡してくれたけど、マルコという奴以外は殆ど俺にボールを渡してこなかった。信用されてないから当然だろう。フィディオやマルコからボールを渡されてもすぐに奪われてしまつし・・・。

「今日はここまでにしよう。解散！」

フィディオがそう号令をかけると皆散らばっていった。あと、オルフェウスの監督は姿を現さなかった。練習前にフィディオに訊いてみると「監督は放任主義みたいな所があつて、基本オレ達の練習に口出しはしないんだ。ただ、たまに見に来てはしっかりできているか確認はするけどね」とのことらしい。

「シンイチ・・・」

フィディオがまた申し訳なさそうな顔をしながら歩み寄ってきた。

「ごめん。まともにプレイすることもできなくて・・・」

「フィディオが謝ることじゃないさ。会ってばかりの俺を信用なんかできるわけないから、ボールを持たせてくれないのも当たり前だ」
「・・・でも、このままじゃあせつかくシンイチを誘ったのに・・・」

「そこはやっぱり頑張るしかないな」
「シンイチ、これから・・・」

「フィディオ、俺はこれからどこに泊まればいいんだ？」

フィディオの言葉を遮って、俺は話題を変えた。おそらく、「一緒に練習しよう」と言いたかったんだろう。嬉しいけど、俺はなるべくフィディオに負担をかけたくなかった。フィディオはれっきとしたオルフェウスのメンバーだ。俺につきつきりになつて、皆と仲悪くなつてほしくない。さすがに、一人では無理が出るだろうし、いずれはフィディオにもお願いするかもしれないけど、一人で頑張れる所までは頑張りたい。たぶん、フィディオは「負担なんかじゃない」というだろうし、それが本心だろうけど・・・いつてみれば、オレの意地だ。自分自身を変えたい。

「え？あ、ああ。あそこに見える宿舎の1号室。俺とマルコと同じ部屋だよ。マルコつて・・・わかる？」

「ああ」

マルコはアンジェロつて奴と共に数少ない俺を迎え入れてくれた奴だ。今の俺にとってはありがたい存在。

「じゃあフィディオは先に戻つてくれ。俺も後で戻るから」

「あ、半田！」

フィディオの返事を待たずに駆けだした。

そして俺は、何エリアかわからない所の練習場までやってきた。いや、ジャパンエリアに行くわけにはいかないし・・・

「さて、一人でやってきたものの・・・何からはじめよう」

ちなみにここまでやってきて、このエリアにあったのは熱帯雨林とサバンナで、家と思われる建物はそこそこあったけど、日本ほどは

なかった。印象的にはアフリカっぽい。ハッキリ言って突然の地理の変化に驚いた。すぐ近くののに、どうやってこれほどの地理の違いを再現しているんだろう。

「・・・何か音が聞こえる」

音が聞こえた方、練習場の片方のゴールに目を向けると一人の少年がゴールバーにボールを蹴り、跳ね返ったボールをまた蹴り、と繰り返している。驚きなのは、結構な距離を置いており、それでいながらあの丸いバーに寸分の狂いもなくあて、跳ね返ったボールも寸分の狂いなく主の元へと戻っていることだ。

「・・・凄いな」

あいつも、あんだだけ凄い技術を持っているのにこんな夜にも特訓している。俺なんかは、死ぬほど特訓しても足りないくらいだ。

「あ・・・」

ボールを蹴っていた人物がこちらに気づいて（結構離れているにも関わらず）駆け寄ってきた。どうしようかと思っただけど、逃げるわけにもいかずそいつがこちらに来るのを待った。

「あれ、知らない人だ」

「あ、いや、えつと・・・どうも」

恥ずかしくて「君のプレイが凄くて思わず見とれていた」なんて言えない。・・・いや、そんな俺の性格じゃないけど。

「僕はロココ。コトアール代表リトルギガントのメンバーだけど、君は応援しに来てくれた人？・・・じゃないよね？」

このライオコツト島で練習しているんだから当たり前といっちゃなんだけど、こいつもやっぱり選手だった。褐色肌で、ピーコックブルー色の髪をしている。それにしてもでかいな・・・顔や声はどちらかといえば幼いのに。

「あくと・・・俺は半田真一」

「シンイチハンダ？変わった名前だね・・・もしかしてダイスケと同じ国の人！？」

「そうでもないと思うけど・・・ダイスケって？」

それにしてもこのロココって奴・・・俺は初対面の人でしかも外国人なのに馴れ馴れしいな。円堂に似ているかもしれない。

「ああごめんごめん。ダイスケはボク達リトルギガントの監督をしている日本人なんだ」

「日本人が監督しているのか・・・お前の言うとおり、俺は日本人だ。ハーフだけだ」

ダイスケって・・・たしか行方不明になった円堂のおじいちゃんも大介だったな。

「それで、シンイチはどうしてここに来たんだ？」

「・・・諸事情ってことにしといて」

イタリアエリアにいたけど、親切な友達に迷惑をかけたことなく、かといって裏切ってしまった友達がいるジャパンエリアに行くわけにもいかななくて、適当にやってきた・・・なんてとてもじゃないけどいえない。

「ふ〜ん・・・」

ふと思ったけど、俺って今考えてみれば・・・日本代表キャプテンとは友達で同じ中学、イタリア代表副キャプテンとは異母兄弟、アメリカ代表とアルゼンチン代表キャプテンとは昔の友達、そして今コトオール代表と知り合って・・・何気に凄くない？いや、俺自体は凄くも何ともないけどさ。

「ねえシンイチ。ここで会ったのもなにかの縁だし、一緒に練習しようよ」

「え？」

突然の申し出に俺は驚いた。初対面の人を練習に誘うなんて・・・ますます円堂らしいな。

「経緯はわからないけど、シンイチもここに練習しに来たんだよね？」

「どうしてわかったんだ？」

「だってボール持ってるし。ここ練習場だし」

「・・・見りゃわかるな。」

「ありがたい申し出だけど、いいのか？さっきの練習を見てる限り、俺なんかお前の足元にも及ばないけど・・・」

「そう？君のプレイを見ていないからなんともいえないけど、仮にそうだとしても関係無いよ。サッカーはたくさんの人とする方が楽しいさ」

そう笑うロココの顔を見てみると、初対面の相手なのにこっちも気にしなくていい気がしてきて・・・（しつこいけど）本当に円堂みたいだ。

「というより、今やってるのは一人用の練習だから、本当に気にしなくても大丈夫」

「あ、そうなんだ」

それなら気にしなくても平気かな？ロココの言うように一人よりも二人の方が楽しいのはたしかだし。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「うん。よろしく、シンイチ！」

そういつてロココが差し出してきた手を、一瞬は戸惑いつつも俺も軽く笑いながら握り返した。

「ああ、こちらこそ、ロココ」

それからは、ひたすら同じ場所にボールを蹴る、タイヤと足をロープで繋いで走る、木の枝にタイヤをロープで繋ぎ前に投げて帰ってきたタイヤをパンチで返す（俺にとってはサッカーでは特に使われない腕や肩がメインになる練習だけど一緒にやった）など、ロココが言うように一人用メニューをやっていた。特に会話もなかったけど、ロココの雰囲気のおかげだろう、気まずい雰囲気があるわけでもなかったからそこそこ楽しめた。もっとも、ロココとの実力差に打ちのめされはしたけど。

「うん、やっぱり一人でやるより二人の方が良いよね」

そう笑うロココはあまり息を乱していない。俺なんか、膝に手をついてゼエゼエ言ってるのに。

「次の場所に移ろうと思うんだけど、シンイチはどうする？」

「次の、場所？」

「うん・・・さつきよりもしんどい練習になるけど」

さつきよりもしんどい練習に今でも疲れている俺は大丈夫か聞いているのか。たぶん、本心で心配してくれているんだろう。でも、俺がオルフェウスに認められようとするなら、ここで音をあげるわけにはいかない。

「・・・大丈夫。やれるさ」

「そう?・・・なら、こっちだよ」

歩き出すロココについていくと、ついたのは泥だらけの練習場だった。これは、久遠監督がイナズマジャパンにやらせたっていう・・・。「頑張つてつくってみたんだ。泥の中だと足が動きづらいし重いし、服についたら体自体が重くなるしボールも重くなる・・・だけど、この中で自由に動けるようになったら、実際の泥なしの場所では凄く動けるんじゃないかって」

たしかに、イナズマジャパンの皆もこの特訓をやった後は動きが軽く、速くなったときいている。けど・・・

「・・・いや、ここでやめてちゃ、今までと変わらないよな」

「シンイチ？」

円堂達には黙ってオルフェウスに入った(まだ保留状態だけど)。正直に告げている一之瀬と違って俺は完全に裏切り者だ。けど、それならそうと、限界まで強くなってイナズマジャパンに挑むのが、せめてもの礼儀、みたいなものになると思う。それを抜きにしても、オルフェウスに認められないといけないし、フィディオ達の足手まといにはなりたくない。なにより、俺自身が今までの中途半端な状態から抜け出したいんだ。

「なんでもない。早速はじめよう」

「・・・うん」

ロココは暫く不思議そうに俺を見ていたけど、何かを察したように頷いた。・・・なんか気づかれた？

「僕はダイスケに出会って、救われた。サッカーで皆と一緒にFF

「Iまで来れた。ダイスケと出会ったのは僕にとって、人生を変えるものになったけど、君も今その時期を迎えてるのかな」

「・・・そんなんじゃないけど」

「いや、そうなのだと思う。円堂に出会ったのもすそうだったけど、・・・でも、それを口にするのは恥ずかしくて頷けなかった。たぶん、円堂やフィディオ、一之瀬とかは頷いて認めるんだろう。」

「まあいいや。それより、練習しようか」

「そういうロココは笑っていて、なんか「言わなくてもわかっている」的な顔をしている。」

「ああ」

「といつても、何か反論すればさらにロココを笑わせてしまいそうだから何も言わないけど。」

そして俺達は先ほどと同じことを今度は泥の中で行った。なんで最初から泥の中でやらなかったのか尋ねてみると「いきなり大変なやつすると体に余計な負担をかけるだろ？だからさっきのはウォーミングアップだよ」と言っていた。俺とは世界が違う。

「よし、後は・・・二人で試合をやるうか」

「・・・え？」

「正気？と尋ねたい気持ちかわきあがったけど、ロココの顔を見て何とか抑えた。さすがにロココも多少息が乱れてきているけど、まだまだいけそうだ。けど俺は立っているのがやっとで、意地でなんとか立っている状態だ。」

「いや、だから、ここで、弱気に、なっちゃ、駄目、だって・・・何とか自分にそう言い聞かせて気持ちを奮い立たせた（成功したかどうかは自分でもわからない）」

「試合といつても、二人でボールを取り合ってどちらが多くゴールを決めるか、だけをやるってことだから勝負って言ったほうがいいかな」

「お手柔らかに、頼むよ・・・」

「こちらこそ」

そうして、勝負を開始したわけだけど・・・

「甘いよ!」

「そんなフエイント、僕には通じない!」

「僕の力はまだまだこんなものじゃない! Xブラスト!」

という具合にボールを奪えず奪われの繰り返しで、必殺技を止める術もあるはずもなく(というか必要なさそうなのに使ってきて、俺は吹っ飛ばされた)、俺は一度もシュートを打たせてもらえなかった。最低でもフィデオと同程度の實力はある感じだった。

「ごめん、つい必殺技まで使っちゃった」

「いや、いいんだけど、さ・・・」

ちなみに、俺はもう立つことができず、仰向けに倒れている。

「それにしても、やっぱりロココは強かったな。俺でも知っている人なら強い奴をたくさん知ってるけど、たぶんトップクラスだ」

「そう言ってもらえると嬉しいな。こうみえても、昔は所属していたチームで一番弱かったんだけど、ダイスケのおかげでここまで強くなれた」

「そうなのか?」

ロココが昔は弱かった?とでもそうは思えないくらい上手かった。

「ダイスケがいなければ、僕たちは弱い集団でしかなかった。僕達は今これからも、どんどん強くなってみせる。それが僕達にできるダイスケへの恩返しにもなる」

「・・・死ぬほど特訓したんだろうな」

「そうだね」

「俺も、特訓したらロココみたいに強くなれるかな」

「なんだか、僕が尊敬されてるみたいで恥ずかしいけど・・・うん、なれると思うよ」

「そっか」

俺は少し自信を持てた・・・というより気が楽になった。もちろん、練習量を減らす、とかはしない。ただ、心のどこかでは、フィデイ

才や口ココみたいになるのは不可能だと思っていた部分もあったのはたしかで、それが心から消え去った。

「・・・さてと、僕はそろそろ戻るよ。遅くまでやりすぎると明日の練習に支障をきたしちゃうしね」

「そうだな、俺も帰るよ。友達が心配してるだろうし」

もしかしたら、フィディオは俺を心配して探しているのかもしれない。そうでなくとも、気になってオルフェウスの仲間どころじゃないかもしれない。今思えば、黙って別れたのは逆に、フィディオに余計な負担をかけてしまったかもしれない。まあ、フィディオのことだから俺の行動に予想して待つているだけかもしれないけど。

「送って帰ろうか？」

「いや、もう少し休んだら動けるだろうから大丈夫だ」

さすがに迷ったわけでもないのに付き添いで帰るのはかなり恥ずかしいし。

「ねえシンイチ。明日もこれないかな？」

「え？」

「ダイスケと同じ国の人・・・日本人の知り合いって、ダイスケを除いたら君で二人目なんだ。残りの一人は女の子だし。練習始める前にも言ったけど、ここで会えたのも何かの縁だし、これからも練習付き合っしてほしいな」

「でも、お前と俺じゃ・・・」

「それも練習前に言ったけど、そんなのは関係ないよ。シンイチが嫌だったし無理だったりするならしょうがないけど」

「そんなことはないけど・・・」

「うん、それじゃあ言い方を変えるよ。僕はね、シンイチ。君のことが気になるんだ。いや、気に入ってしまった、と言ってもいいかな。弱いのに強い人達に追いつこうとしてる姿が昔の僕と重なるんだ。だから、友達として君の応援をしたい。結果的に君のためになるかもしれないけど、これは僕が勝手にしようとしてることだから、シンイチは気にしなくてもいいよ」

「・・・卑怯な言い方だな。勝手に友達にされてるし」
そんな言い方をされたら断れない。

「わかつて言ってるからね。それとも、シンイチは僕と友達になるのは嫌？」

なんてきいてくるけど、ロココは笑っている。俺が嫌だと答えないとわかってるんだ。あるいは、わかっていなくても、円堂みたいに信じているのかもしれない。

「・・・わかった。来れるかどうかはわからないけど」

「それは心配しないでいいよ。僕はどちらにしるいつもここでこの時間に練習してるから」

「うん、わかった」

「それじゃあ、また明日！」

そういつてロココは俺に手を振りながら走り去っていく。・・・本当に体力あるな。

「は・・・」

盛大なため息を吐く。本当にロココは凄かった。この二日で凄い選手にばかり出会って、強くなるうという思いが正直、消えそうになっていたけど、フィディオの勧誘に始まり、昔は弱かったというロココに出会って、今またその思いは俺の中にできている。たぶん、今までで一番強く思っている。今、変わらないときと俺は一生変われない。

「まずは、なんとしてもオルフェウスの皆に認めてもらうんだ」
体が何とか動けそうだったから俺は起き上がり、フィディオ達がいる宿舎へと向かった。ただ、決意とは裏腹にフラフラだったけど・・・

「よ、おかえり」

もう遅い時間だったから、静かに宿舎に入って、フィディオから言われた1号室の扉をなるべく音をたてない様に開けると中では、マルコが笑顔で出迎えてくれた。

「・・・マルコ起きてたんだ？」

フィディオを探すと、机に突っ伏す形で寝ていた。毛布がかけられていて、たぶんマルコがかけたのだろう。

「ああ。フィディオはお前を待つとくつて言ったんだけど、キャプテンが寝不足になったらどうするんだって言って寝かせよと思った、っていうよりすぐ寝ちまつたけど。ベッドに寝かせようと思ったけど起こさないように静かにできるほど俺力ないし、起こすのも躊躇われたからそのままにしてる。」

「もしかして、マルコも俺を待つてた？」

「いや、読んでいる本の先が気になって寝れなかっただけ」

「そ、そうなんだ」

マルコの手を向けるとたしかに本を持っていた。タイトル『本当にあつた怖い話集』・・・ん？

「・・・変わった本持つてるんだな」

「フィディオが持つてたんだよ。これ日本のものらしいけど、怖いなく。ゾンビとかアメリカのホラーでもなくて、ゴースト、いや幽霊と言った方がいいか、そういう日本のホラーでもないけど」

なるほど、今マルコが読んでるのは、つまり人間の怖い部分を怖く描いた話なのか。それにしても、フィディオはなんでそんなものを持つてたんだろう？怖い話好きだったっけ？別れてる間に好きになつたのか？

「ところで、シンイチはなんでそんなボロボロなんだ？」

「・・・ぶつ飛ばされた」

「え？」

「いや、なんでもない」

「ぶくん・・・ま、別に隠れて特訓してたのか聞かないけどな」

そう言つてマルコは本に目を落とした。わかっているんじゃないか・・・。俺は寝る前に一旦体を洗つておこう。

「シャワーあるかな？」

「ん」

マルコは目を落としたまま、俺から見て左手を指差した。そんなに面白いのか？

「ありがとう」

俺はマルコにお礼を言ってからシャワー室に入った。・・・体を洗い終わってシャワー室からでるとマルコも本を持ったまま机に突っ伏して寝ていた。本当に本を読むのに夢中になってしまっただけなのか、俺を待つて寝ずにいてくれたのか・・・何となく後者な気がする。

「フィデオに毛布をかけてあげてるのに、自分も忘れてどうするんだよ」

俺は『マルコ』と書かれたベッドから毛布を取り出してマルコにかけた。オルフェウスの皆から認められるのは大変だけど、マルコやアンジェロのように迎えてくれる奴もいるんだ。少なくともフィデオは、俺が強くなるって信じてくれる。

「俺も明日に備えて、そろそろ寝よう」

INオルフェウス（後書き）

どうでしたでしょうか。オルフェウスメンバーがあまりでてきませんが、これから出番が増えてきます。ちなみに、当初は最初からフイデオと二人で特訓の予定だったんですが、描いているうちに違う道に進んでしまい、ロココの登場が凄く早くなりました。あと、予定では魔界軍団、天界の使徒、オーガ&カノンも登場する予定で。今のところ、遙か先になりますが。ただ、書いているうちにまた予定とは違うことになるかもしれません・・・。

感想、意見等お待ちしております！次話で再会できるのを願いつつ、
それでは！

二日目の朝 side F

「……ん……」

目を開けると窓から日が差し込んできていた。……あのまま寝ちやったのか。シンイチを待っている、と伝えるとマルコにキャプテンが寝不足でもしたらどうするんだ、と言われて、それでも待っていようかと思っただけどやっぱり皆に迷惑をかけるわけにはいかなかったから寝させてもらうことにした。でも、そこからの記憶がすぐれないからそう決めたらすぐに寝ちゃったんだろう。背中にはタオルがかけられている。たぶん、マルコだ。そのマルコも俺と机を挟んだ所で寝ている。彼もそのまま寝ちゃったらしい。

「そうだ、シンイチは……」

と、新たに置かれたシンイチ用のベッドを見てみるとそこにはちゃんと彼がいた。いつ帰ってきたのかはわからないけど、特訓していたんだろう。たぶん、俺に迷惑をかけたことなく黙って……。俺はそんなの気にしないけど（というより自分から誘おうと思っただけだ）、というのもシンイチはわかった上でそれでも一人でやるうと思っただのかもしれない

「フィディオ、いるかい？」

と、考えに耽っているところとノックと同時に監督の声がした。監督はパオロという名前で、普段は柔らかい物腰をしているけど、指導する時なんかは厳しく、また意志もはっきりしていて頼りになる監督だ。

「はい、少し待ってください」

俺は二人を起こさないよう足音をたてないようにしながら歩きドアを開けた。

「すまないね、こんな朝早くに」

「いえ、それよりどうしたんですか？」

「半田真一をオルフェウスに入るのを許可したかわりというわけではないけれど、君に頼みごとがあつてね」

監督はたいてい人に仕事を頼む事はあまりいしない。もちろん、無理もしないようしてるみたいだけど　　珍しいこともあるものだ。

「今日ある人物がこの辺りの視察に来るそうなんだ。最初は僕がっこうと思っていたんだけど、どうやら連れがいるらしくてね、彼女がいるとなると僕よりもフィディオの方がいいだろうと思ってね」

「彼女・・・女性ですか？」

「うん、女性っていうほど大人じゃないけどね。ルシエだよ」

「え？」

ルシエは金髪のボブヘアで、グリーンの瞳をした盲目の少女だ。彼女とはたまに会っており、その度にあまり外を歩けない彼女を連れだしている。手術を受けると直るんだけど、成功率はもちろん100%じゃなく、その恐怖心から受けられずにいて、励ましたりしているんだけど難しいみたいだ。まだイタリアにいたはずだけど・・・。

「彼女もライオコツト島に？」

「そうらしいよ。視察に来られる方・・・ミスターKというんだが、彼とも交流があるらしい。それで、フィディオと会いたいということとで連れてきてもらったみたいだ。ここにも大きな病院があるしね」ルシエからは妙に懐かれていて、会う度に太陽のような笑顔を浮かべてくれて、俺もその笑顔を見るたびに元気をもらっている。

「・・・わかりました。引き受けます」

「ありがとう。それじゃあ、もうそろそろ着くみたいだから、早速空港に向かってくれないかな？」

「わかりました・・・あ、でも」

俺はまだ寝ているシンイチを見た。監督が何も言わないから、おそらくは昼頃には終わり、練習の合流できるだろうけど、それまでは・・・。

「彼の事なら心配なくていい、というよりも彼にも頼みごとがあるしね」

「シンイチに頼みごと、ですか？」

「うん、たぶんそっちの用もフィディオと同じくらいに終わると思うから」

「・・・わかりました」

オルフェウスメンバーではなくシンイチに頼みごとが何かは気になるけど、監督のことだから何か考えがあるんだろう。そう考えて、俺は監督に「失礼します」と頭を下げてから空港に向かおうとしたところで、出てすぐの所で待っていたかのようにアンジエロがいた。

「・・・アンジエロ？」

「俺も監督からフィディオ一人だと寂しいだろうからついていってほしいって頼まれたんだ」

「・・・そうなのか」

べつに俺は寂しがり屋でもないけど、監督からはそう見えてたりするのかな？

「それじゃあ時間もないだろうし、早速行こう」

「うん」

「あおさ、フィディオ」

空港へと向かっているとアンジエロが話しかけてきた。

「昨日も訊いたけど、なんでフィディオはシンイチって奴をオルフェウスにいれるのにそんなに本気になってるんだ？『オレのわがまま』って言うってたけど、フィディオが自分のわがままだけで日本人をイタリアチームにいれるという行動を起こすとは思えないんだ」

「うん・・・オレのわがままっていうのは本当なんだけど」

それ以外の気持ちなんて無かったと思う。

「・・・強いていうなら、一昨日一緒にサッカーやった時にシンイチは心の底から楽しめてる感じがなかったんだ。単純にオレ達と半田に実力の違いがあったからっていうんじゃないか。いや、それもあつたとは思っただけど、『自分は弱い』とかそういう気持ちがあつたぶん心に根付いちゃってるんだと思う。でも、見ている限

り才能が無いとかじゃなさそうだし、だったらオレや皆と一緒にサッカーしたら実力も伸びて本当の意味でサッカーを楽しめると思った・・・からかもしれない」

もちろん、それならそうでオルフェウスに入らないといけないわけではなかったし、このまま入れずに終わってしまえば余計にシンイチはサッカーを楽しめなくなるかもしれない。また、そうじゃなくても結局これも『シンイチにはサッカーをしつかり楽しんでほしい』というオレの勝手な気持ちだ。

「そうか。まあ、たしかにサッカーは楽しくやってほしいな」

「うん。だから、シンイチが実力をあげたり、必殺技を習得したがつてるなら、それでサッカーを楽しめるようになってオレと一緒にできるようになるのなら、オレはなんでもするつもりだ・・・？」
突然視線を感じて後ろを振り向いた。

「フィディオ？」

けど、そこにいたのは何やらはしやぎながらこっちを見てる女子（たぶん、オレとそう変わらない年だと思う）が二人いるだけだ。

「ね、ね、見た見た！？フィディオよ！？」

「白い流星を生でしかもこんなすぐ近くで見れるなんて、ライオコツト島まできて良かった〜！」

「隣にいるのはアンジェロよね！？」

「ええ！相変わらずかわいいわ！」

・・・TVの取材なんかも何回か受けた事あるから、オレや皆が人気あるのは知ってるけど、さすがにそばでこつもはしやがられるとかなり恥ずかしいな。

「フィディオがこつち見たわ！」

「キヤーーー！！！」

彼女たちはオレ達に聞こえてないと思っているのか、あるいはそんなの気にしていないのかはしやぎ続けている。手を振ってきたので、オレも笑いながら（苦笑いになってたと思う）手を振りかえすとまたもや「キヤーーー！！！」とはしやぎだした。

「フィディオは人気者だな」

「皆も人気あるじゃないか」

「・・・はあ〜」

アンジェロに呆れたような溜息を吐かれた。なんでだろう？TV取材やファンレターなんか受けた事あるけど、それは皆も同じだ。・・・それよりも、さっきの視線は何だったんだろう。彼女達・・・とは思えないんだけど。振り返った瞬間、物陰に隠れるようにしてピククのマントが見えたけど関係あるんだろうか？

「・・・フィディオ、考え事か？」

「え？あ、いや、何でもないよ。空港に向かおうか」

歩き出そうとすると、後ろから今度はガタンという音がしたので振り返ると看板が倒れていた。

「風で倒れたのか？でも、そんなに風はでてないし・・・」

髪が軽く揺れる程度しか風はでていないし、看板の近くに人もいない。女子達がやったとは思えないし・・・と、考えていると上から何か音が聞こえて顔を上げた。

「な!？」

驚いて飛び退くと、さっきまでいた場所に植木鉢が落ちてきた。

「・・・な、なんで・・・？」

驚きで心臓がバクバクしてるのを落ち着かせようとしながらも一度上を見してみる。窓はあつたりしない。

「屋上から落ちてきたのか・・・。気づかなかつたら今頃・・・」
想像するとまた体が震えてきた。屋上からの高さを考えると、頭に直撃していたら即死だ。

「それにしても危ないな。屋上に植木鉢を置くなんて・・・」

「いや、たぶんそうじゃない」

「え？」

「さっきフィディオが言ったように屋上に植木鉢を置くなんて危ない。だから殆どの人は置かない。それに、さっきの看板もそうだけど、風が原因にしては弱すぎるし、それ以外に自然に落ちてくる原

因は見当たらない・・・だから、たぶん・・・」

「・・・うん」

正直、考えなかったわけじゃない。でも、オレは殺されるほど恨まれるようなことをした覚えはないし、考えたくはなかった。

「もしかしたら、世界から注目されるぐらいに活躍してるフィデオに嫉妬しての行動かもしれない」

「そんな・・・」

正直、そんなことで、と思う。でも、そう思うのはあくまでオレの感覚であって、やっぱり殺したいと思うほど嫉妬　憎悪といったほうがいいかもしれない　の気持ちを抱く人がいるんだろうか。

「もちろん、事故の可能性もあるわけだけど、どうする？警察にいうか？」

「・・・いや、いいよ」

アンジェロの言うように事故の可能性もあるわけだし、明らかに怪しい人物を見たわけでもない。できるなら、見たこともない『だれか』を疑ったりしたくない。

「・・・そうか」

「それより、だいぶ時間が経ってしまったし急いで空港に向かおう」
「・・・そうだな」

それでも、やっぱり気にはなるけど何とか気持ちを切り替えてオレ達は空港へと向かった。

「あ、来たみたいだ」

空港で待つこと数分、アンジェロが指差した方を見ると、人ごみの中にルシエを見つけた。その隣にはたぶんミスターKだろう、金髪で長身のサングラスをかけた男性も一緒にいる。

「貴様たちか？迎えの者は」

「はい、お待ちしております、ミスターK。オレはオルフェウス副キャプテンを務めているフィディオ・アルデナといいます。こちら

らはアンジェロ・ガブリーニです」

「はじめまして、ミスターK」

「この声は・・・フィディオにいちちゃん！」

挨拶したという所でルシエが声で人物と場所を判断したのか、飛びついてきた。突然の行動に驚きはしたものの何とか受け止めた。

「・・・ルシエ、危ないよ」

「大丈夫！フィディオにいちちゃんの声は凄くわかりやすいから！」

「そういうことじゃないんだけど・・・」

とはいったものの、ルシエの笑顔を見るとやっぱり「ま、いつか」とも思ってしまう。オレって妹とかいたら凄く甘い兄さんになりそう・・・。

「アルデナ・・・なるほど、貴様が・・・」

ミスターKがこちらをじゅつと見ていることに気づいた。

「？オレの事知ってるんですか？」

「いや、なんでもない。さて、さっそくだが、ジャパンエリアを案内してもらおうか」

「ジャパンエリア・・・ですか？」

わざわざライオコット島、しかも視察できたのだから、観光ではないだろう。そもそも、ライオコット島は日本の和をそこまで再現していないらしい。ということは・・・

「イナズマジャパンですか？」

隣にいたアンジェロがミスターKに尋ねた。イナズマジャパン、シナイチの友達がいる日本代表チーム・・・。

「そうだ。あそこには私の知り合いがいるのでな」

「影山のおじちゃんの知り合い？」

ルシエが（俺に抱きついたらまま）影山に尋ねた。ルシエは興味がない限り、他の人達の話に割ってくることはない。そんな彼女がこうやって聞いてくるといふことは監督が言っていたように交流があった、しかもそれなりに親しい間柄なのだろう。

「そうだ・・・悪いが、急いでる。移動しよう」

「あ、はい」

ミスターKはアンジェロを連れて歩き出した。時間がないのはいいけど、アンジェロもそうだけど、オレに抱きついたままのルシエはスルーなのか。ルシエも見ると、離れる気はなさそうだ。

「・・・しようがないな」

たしかに、彼女は盲目だから歩かせるのは不安があるし・・・言いわけだけ。オレは一旦ルシエを下ろし、「え〜」と拗ねる彼女を背中に乗せて、アンジェロ達を追いかけた。

「ここがジャパンエリア、イナズマジャパンの宿舎になります」

オレ達は無事にイナズマジャパンのいる所まで来られた。無事、とはいってもオレはルシエをおんぶしたままここまで来たわけで、道中の周りの視線がなんか痛かった。ちなみに、ルシエはまだ降りそうにない。

「ここまで送ってくれたのには一応お礼を言っておこう。貴様達はもう帰れ」

「え？」

アンジェロと二人で素っ頓狂な声をあげてしまう。

「ここからは私一人で十分だ。そのルシエも連れて帰るといいいや、連れて帰るといって・・・」

「しかし、案内の方はよろしいのですか？」

「私がおったのはここだけだ」

だからといって、「帰れ」というのは酷すぎないか？

「・・・わかりました。いこう、アンジェロ」

「え？あ、ああ」

何となく、この人とは長く付き合わない方がいいような気がして、アンジェロに声をかけてオレ達は行きの道を戻っていった。

「なんなんだ、あいつ。お礼どころか、態度が酷すぎるだろ。上から目線、とかいうレベルじゃない。何様なんだ」

歩いてる途中、隣ではアンジェロがミスターKに対して文句を言っていた。正直、オレも同じ思いだ。

「うん、影山のおじちゃん、態度は冷たくても優しくないわけじゃないんだけど・・・」

「いまだオレの背中にいるルシエはそういうけど・・・ルシエがそういうならそうなんだと思う。ルシエは目が見えないけどそのためなのか、人の声から性格や本質を見抜くのは人より優れている。けど、それでも、あの態度は・・・」

「とりあえず、戻ろう。予定より早まったけど、その分練習ができるし」

「そうだな」

「・・・！」

二人で喋っている所でまた視線を感じた。振り返ってみるけど、先ほどと同様、誰もいない。今回はあの女子二人組もない。

「フィディオ？」

「・・・視線を感じるんだ。今は消えたけど」

「・・・それでさつきも？」

「うん」

「フィディオにいちゃん、あつちになんか動物がいるよ。唸ってる感じ」

ルシエがどこかを指差してオレはそっちを見てみると・・・

「・・・犬？」

そこには黒い大型の犬がいた。いや、でも、これは・・・

「・・・オオカミだ」

黒いオオカミはこちらを見て「ウ~~~~」と唸っている。まるで、攻撃してきそうな気配・・・。

「・・・アンジェロ、このままゆっくり下がろう」

「うん。もし襲ってきたら・・・」

「その時は全力疾走だ」

そうしてオレ達はオオカミと睨み合いを続けながら静かに後退する。

オオカミもゆつくりと進んでいて、距離は縮まりもしないし、離れもしない。けれど、しばらくその状態が続くとオオカミは止まって先程よりも大きな唸り声をあげた。

「?・・・!走れ!」

少し不思議に思っていると、突然オオカミが跳躍して飛び掛かってきた。なんとあそれをかわすと同時にオレ達は後ろ歩きを止め、全速力で駆けだした。

「・・・あれは・・・」

前に振り向く際に一瞬だけ、物陰にピンクのマントをかぶった人物をみかけた。さっきと同じ人だろうか・・・。

「フィディオ!倒せないのか!?!」

「無茶いな!」

中型犬相手ならともかく、生身の人間が銃や剣といった武器を持たずに、大型のオオカミを相手にするなんて無謀も良い所だ。せめてボールでもあれば一発くらい蹴りあてて相手を怯ませるくらいならできるかもしれないけど。

「フィディオにいちゃんならいけるよ!」

と、オレにおんぶされているルシエは目が見えない為状況がハッキリわかっていないからなのか、楽しんでいる様子だ。・・・明るく強く育ってくれてにいちゃんは嬉しいよ。

「ユニコーンブースト!」

「スパイラルショット!」

「え?」

物陰から飛び出してきた三人が強力なボールをオオカミに蹴りあてた。オオカミは「キャン!」と泣いて走り去っていった。・・・今のは・・・。

「ヘイ!ダイジョウブかい?フィディオ!」

「オオカミに追いかけられている君達をみつつけてね。たまたまボールを持っていてよかったよ」

「怪我はないようだな、フィディオ。君と嬢ちゃんも」

「マーク！ディラン！それにイチノセも！」

「やっぱりこの3人だった。」

「フィディオにいちちゃん、誰か来たの？」

「あ、ああ。嬢ちゃん、と言ったのがアメリカ代表ユニコーンキャプテンのマークで、一番明るいのがその相棒のディラン、残りの一人が、同じくユニコーンの『フィールドの魔術師』と呼ばれるイチノセだ」

「アメリカ代表！？すごいな」

「・・・なんでアメリカ代表がこんな所にいるんだ？」

三人と殆ど面識がないアンジェロが疑いの目で彼らを睨みつけながら尋ねた。今オレ達はイタリアエリアるジャパンエリアの間くらいにいてアメリカエリアとは離れている。ライオコット島自体凄く大きいわけではないから、アメリカエリアからもそこまで遠くないから距離的にはいても不思議ではないけど・・・

「イチノセが愛しのイナズマジャパンをみてみたいっていうからジャパンエリアに行つてたのサ」

「ま、イナズマジャパンがどんな奴達か知るのにもよかったからな、オレ達もついてきたんだ」

「見たかった・・・というより、円堂達を見て決意をちゃんとつけたかったんだけどね」

アンジェロの視線になんともないように三人が答えた。たぶん、彼らは嘘をついていない。

「そういつてオレ達オルフェウスをみにきたんじゃないのか？」

「けど、アンジェロはまだ疑っているみたいだ。まあ、敵となる人達がいるはずもない自分達がいる近くにいるのだからしょうがないけど。」

「そうそう、オルフェウスといえばマークがシンイチシンイチって・・・」

「おい、やめろ」

何かを語りだそうとしていたディランの口をマークが急いで手で覆

った。そついやマークって……。

「一昨日は半田やフィディオとの思い出話を1時間近く聞かされたね。昨日は5時間くらい？」

マークがディランを防いだのも虚しく、イチノセが続きを喋った。

「……………していた時はシンイチがあんな事をしてな、とか、あれでもシンイチも昔はおれ達と同じくらい上手かった、とかいろいろと喋ってくれたよ。おかげで俺達は眠くて仕方なかったけど」

思い出したけど、マークはシンイチの事が好きだった。シンイチのいる前ではあまり見せないけど、時々依存しているのではないかと思うほどだった。しかもその性格のせい、見ためはキリっとした顔で長々と語るのだから違和感が凄かった。シンイチと別れてから暫くは凄く落ち込みよう、オレよりも落ち込んでいたと思う。暫くしてから元の状態に戻ってシンイチの話題を出さなくなったから忘れていたけど。もしかしたら、シンイチの事を思い出してまた落ち込むのを避けようとしていたのかもしれない。

「……………マーク……………」

「……………オレは何も喋っていない」

呆れの視線を浴びせると、マークは顔を背けた。顔が少し赤くなっている。恥ずかしいのなら初めから言わなければいいのに。まあたぶん、シンイチと久しぶりに会って、その喜びを発散したかったんだろっけど。

「ところで、そのマーク愛しのシンイチは今日はいないのかい？」
とイチノセが尋ねてきた。……………イチノセも少しずつマーク達に馴染んでいるみたいだ。

「ああ、今日はちよつとね」

「……………ちよつといいか？」

「アンジエロ？」

「なんでアメリカの人達がシンイチを知ってるんだ？そもそも、フィディオとその3人仲良しみただけ」

……………そういえば、オレやシンイチとマーク達の関係は言っただけ

つたっけ。

「マークとオレ、シンイチは昔からの知り合いなんだ。マークを通じてディランやイチノセとも知り合った。それと、この際だから言っておくと、アルゼンチン代表のテレスとも旧友だよ」

「・・・そうだったのか。さっきの会話でなんとなくそんな気もしてたけど」

「ミーも一つ質問ネ。そのボーイ、オルフェウスのユニフォーム着てるけど、小学生じゃないのかい？まあ、小学生がいてもおかしくはないんだけどネ」

ディランのその疑問にオレが答えるより早く当の本人が答えた。

「れっきとした中学生だよ。子供みたいで悪かったね」

やっぱりそっぽを向いてしまった。アンジェロはかなり身長が低めで、そのせいでよく実際より年下に見られがちだ。ちよつとしたコンプレックスになっていて、アンジェロの飲み物はいつも牛乳でそれ以外の飲み物は殆ど飲まない。

「・・・フィディオ、早く帰って練習しよう」

気分を損ねてしまったらしいアンジェロはオレの腕を引いてどんどん歩いていく。

「ちよ、アンジェロ、待って・・・」

と訴えてみるもののアンジェロはどんどん歩いて行ってオレもそれに引っ張られる形になる。オレはマーク達に手を振った。

「あゝもう・・・マーク、ディラン、イチノセ、また今度！」

「グッバイネ、フィディオ！ボーイもソーリーネ！」

「半田にもよろしく！」

「試合を楽しみにしているぞー！」

こうしてオレ達はユニコーンの皆と別れた。

二日目の朝 side H

誰かに体を揺すられて俺は目を覚ました。

「ん・・・あ、マルコ」

目を開けるとちょうど俺の顔を眺めるようにマルコが顔を出していた。・・・フィディオもそうだけど、マルコもカッコいいな。

「お〜い？」

マルコが俺の顔の前で手を振るのを見て俺は意識を覚醒させた。

「あ、えつと・・・おはよう、マルコ」

俺は起きて早々にを考えてたんだろう？

「おう、おはよう。監督が呼んでるぜ」

そういつてマルコが親指で後ろを指差す。そちらに目を向けると30代半ばくらいの男性がいた。・・・この人がフィディオ達の監督か。

「君が半田真一くん、だね。初めまして、私はオルフェウスの監督をしているパオロだ。これからよろしくお願いするよ」

「は、はい。こちらこそ、おねがいします」

パオロ、というのかこの人は。物腰柔らかそうな人だな。

「それで朝早くから悪いんだが、一つお願いを聞いてくれないかな？」

「俺に、ですか？べつに構わないですけど・・・」

いくら事前にフィディオから知らされてるとはいえたった今会ったばかりのオレにお願いってなんだろう？

「ありがとう。実は、このライオコット島に視察に来ている方がいるんだが、その方が一人選手を連れてきているみたいだね。彼と試合をしてほしいというお願いが来たんだ。その子は名は知られてないらしいけど、世界でもトップクラスの实力を持っているらしい」

「・・・俺でいいんですか？」

世界トップクラスということはフィディオ達と同レベルだ。そんな

選手なら、もつとほかの奴らを連れて行った方がチームの評判の為にも相手の為にもいいんじゃないだろうか。

「ああ。別に相手はどんな人でも構わないと言われている。君もそういう強くて、なるべくいろいろな選手と試合をする方が何かを身につけられるんじゃないかと思ってね。それと、マルコ、君も一緒に行ってあげるといい。たぶん、話を聞く限りじゃ君達よりも上の選手らしい。ジャンルカも連れて行って3人で行ってきてほしい」

「・・・オレ達より強い云々はその場で見極めるとして、3対1なんて俺は嫌っすよ？」

「そこは大丈夫。あちらもその選手が二人ほど連れてきているらしく、その二人も相当な選手だそうだ」

それを聞いた途端、マルコは先ほど嫌そうな顔をしていたのにパツと明るく笑顔になった。

「それならそうと早く行ってくれよ。3対3ならオレも行くぜ。どんな奴かも気になるし、シンイチのプレイも見てみたいし」

そういうマルコの顔は本当にわくわくしてそうな感じた。切り替えが早いな。

「ありがとう。それじゃあジャンルカは宿舎入口で待ってもらっているから君達も早速出かけてくれ。場所はイタリアエリア練習場だから遠くはないよ」

「わかりました」

「二人とも来たみたいだな」

宿舎から出るとすぐそこにジャンルカがいた。俺に視線を向けたけど、それも一瞬ですぐにマルコに向いた。

「場所はすぐそこだったよな。さっそく行くぞ」

ジャンルカはそう言ってすぐに歩き出した。・・・ブラージほど俺を拒絶してるわけじゃないみたいだけど、やっぱりジャンルカも俺の事は歓迎していない。当たり前のことだけど。

「・・・シンイチ、気にするなよ。あいつは元々ああいう性格だし、

根は優しい奴だ。いずれはお前とも仲良くなってくれさ。」

俺が落ち込んでいるようにみえたのか（いや、実際に落ち込んでいたけど）マルコが励ますように言ってきた。彼らから見て俺みたいな弱い異端人をこういう風に出迎えてくれる方が珍しいんだ。

「うん、ありがとう、マルコ」

「どういたしまして」

マルコはにっこりと笑った。

「監督、何故あんな嘘をついたんですか？」

「何故って・・・そんなの、本当の事を言ってしまうえば彼は気にしてしまっただろう？」

「ならば何故世界トップクラスの、しかもあいつと面識が多少なりともある選手を『わざわざ探し出し呼び出してあいつと試合するよう頼んだ』んです？しかも誰かの依頼、という嘘についてまで」

「それはね、彼の為でもあるし僕達オルフェウスの為でもあるんだよ」

「彼の為、というのはなんとなく理解できますが・・・」

「うん、まあね。これは彼の成長の為の糧となってくれらるだろう。」

「オルフェウスの為、というのもそこにあるんだ」

「・・・つまり監督はあいつがオルフェウスの戦力となると考えているんですか？」

「うん。まあそう簡単にはなかなかならないだろうけど、過去の彼のデータを見てみると面白いことがわかったんだ」

「面白いこと？」

「彼の約8年前〜6年前、つまりイタリアに住んでいた頃だけど、この時期にフィディオと彼、それにアメリカ代表のマーク・クルーガーとアルゼンチン代表のテレス・トルーエは他数名を加えてジュニアチームを組んでいたらしくてね」

「・・・フィディオはアメリカ代表キャプテンとアルゼンチン代表キャプテンの二人と知り合いだったんですか？というより彼らも一

時期はイタリアに？」

「そういうことになるね。そうなるまでの経緯はさすがにわからなかったけど」

「それで、面白いこととは？」

「ジュニアチームを組んでいた頃、彼らはそれぞれ得意分野があつて、フィディオがドリブル、マークはパス、テレスはディフェンスがそれぞれチームで一番うまかつたんだ」

「・・・あいつは？」

「彼はね、当時でいえばフィディオよりもシュートが上手くてチームで一番の得点王だったらしいんだ」

「フィディオよりも？」

「もちろん、早い段階で成長を迎え終わった可能性もあるけど、もしかしたら彼はフィディオを上回るオルフェウスのエースストライカーとなるかもしれない」

「だかわざわざわ？」

「うん。マークとかイナズマジャパンの彼らだと親密すぎるからね。ちようど、なんていうのかな、相手　今回に限っては彼

を容赦なしに叩き潰す事も厭わない選手を探したんだ。彼、というよりも彼のいたサッカー部は一度、今回の依頼主に勝ちましたものの容赦なく叩き潰されかけたみたいでね。それなら、2度同じことを味わってもらおうかと思つて」

「・・・それは諸刃の剣になりませんか？」

「そうだね。でも、世界を相手に戦うんだ。そして、その時期は迫つている。ゆっくり成長してる時間はないんだ。だったら、一か八か懸けてみようかと思つてね」

「なあジャンルカ」

「なんだ？」

歩きながらジャンルカに話しかけるとこっちに向きはしないけど、返事だけはしてくれた。

「ジャンルカのポジションって・・・たしかMFだったよな」

「そうだけど、それが？」

「あ、いや・・・俺もMFだからよろしくって思って」

「よろしく」

うう・・・返事はしてくるんだけど、かなり素っ気ない。話す気力がどんどん失われていく。と、俺がジャンルカとの話し方について悩んでいるとマルコがこっそりとジャンルカの後ろ斜め横に近づいた。何やってるんだろうと思って見ていると・・・

「ヒヤッ!？」

今までのジャンルカのイメージを軽く壊してしまうような声をあげた。マルコがジャンルカの耳に息を吹きかけたんだ。

「マルコ!そういうちょっかいじみたことはやめると言ってるだろう!」

「だってジャンルカって暗めだからこうでもしないと場が盛り上がらないし」

ジャンルカがマルコに対して怒鳴っているけど、マルコは漫画的な表現を使えばにしし、と笑っていた。

「な、シンイチ、お前だってそう思うだろ？」

つてそこで俺に振るのか!? 案の定、ジャンルカは俺を思いつきり睨んでいる。

「あゝ、えゝつと・・・人それぞれじゃないか？」

とりあえず無難と思われる返事をしておいた。

「なんだよシンイチまで。俺だけ空回りしてんじゃん」

賛同してもらえなかったからか、マルコは「ちえっ」と言いながら頬を膨らませた。なんか可愛い。

「マルコは逆にはしゃぎすぎなんだ、子供じゃあるまいし」

「別にはしゃいでるつもりはないぜ? けど、人生明るく生きなきゃ損じゃん」

・・・何となく、昔の俺とマークのやりとりを思い出した。昔は俺も明るさだけでいえばマルコ並みに明るかった。対してマークは、

あの時から既に今と変わらないくらい冷静でクールで、お互いに「もっと明るく」「もっと冷静に」とよく言い合っていた気がする。マルコとディランも似たような関係だと思っ。

「まあいいさ。それより、そろそろ着くな」

ジャンルカが練習場を見て話を切り上げた。俺とマルコも練習場に目を向ける。そこにはパオロ監督が言っていたように3人いた。・

・え？

「君達が、僕の練習相手になってくれるというオルフェウスの三人かな？」

その中央にいるのはたしか世宇子中キャプテン・・・

「おや？君はたしか円堂君たちと同じ中学の・・・」

当時、俺達雷門中を圧倒的な強さで完膚無きまでに叩き潰した・・・

「なら自己紹介は・・・と思ったけどもう二人いるみたいだし一応しておこうか。僕は、韓国代表ファイアードラゴンの一員、アフロデイだ」

アフロデイ、本名亜風炉照美だった。その容姿は初めて会った時から変わっておらず、腰下ほどまである金髪の長髪で、中性的な外見をしている。自称神を名乗る自信家なだけあってその実力は圧倒的で、円堂が諦めない根性を見せたり、そんな円堂にこいつが怖氣ついたり、俺達も限界を超えたプレイをしたりと様々な要因が重なってようやく勝てた。俺達一部メンバーがエイリア学園の1チーム

たしかジエミニストームとかいう名前　に怪我を負わされ

入院している間、イナズマキャラバンに助っ人として登場してくれたらしい。実は韓国出身で韓国代表としてFFEAアジア予選に出てきた、という話を円堂達から聞いたときは驚いた。

「俺達もしておくか・・・。俺もこいつと同じファイアードラゴンの一員、バーンだ」

「私も二人に同じくファイアードラゴンの一員で、ガゼルだ」

この二人については詳しくは知らない。ただ、円堂達から聞いた、アフロデイだけじゃなくエイリア学園のキャプテン二人赤い髪をし

た奴と青白い髪をした奴がに韓国代表でできた、という話から考
えるとこの二人がそうなんだと思う。バーンと名乗った人物は炎の
ように真っ赤な髪をしていて、その顔から想像するに気象は荒そう
だ。一方、ガゼルはバーンと反対にしたかのように青白い髪をして
いて、落ち着いていて冷静沈着そうだ。

「じゃあ一応俺達もしておくぜ。俺はイタリア代表オルフェウスの
マルコだ」

「同じくオルフェウスのジャンルカ」
「俺は・・・」

マルコとジャンルカも自己紹介したので俺も続けて言おうとしたけ
どアフロデイに遮られた。

「たしか半田真一、だったよね？彼から聞いていた人物が君なのか
？君はたいして強くなかったと思うけど・・・まあいいか。彼から
は練習相手を完膚無きまでに潰すよう言われているからね、容赦は
しないよ。特に君には」

彼というのはミスターKだろうか。それよりも、つまりは本気で来
るってことか。しかも何故か俺ご指名で。アフロデイは俺の中で最
強格・・・実際の所はともかくイメージではファイデオやマーク、
田堂や鬼道に豪炎寺、あのロココよりも強いイメージがついてしま
っていて、俺なんか勝てる所が微塵も想像できないのが正直なと
ころだ。

「アフロデイ、俺達もいることを忘れるなよ」

「そうだよ。イナズマジヤパンに負けて私達はFFI本戦に出るこ
とが叶わなかったんだ。その憂さ晴らしをここでしたいな。とはい
っても、その実力が彼らにあれば、だけど」

ガゼルが見下すかのような目で俺達を見ながら笑う。隣からピキッ
という音が聞こえた気がしてみるとマルコが顔を引き攣らせな
がら笑っていた。

「へえ、じゃあオレ達の力見せてやるよ」

どうやら自分達が見下された態度をとられたことに腹を立てている

らしい。

「韓国なんてしょせんは予選落ちチームじゃないか」とはジャンル力で、彼も腹を立てたらしい。

「ふん……じゃあとりあえず始めようか」

そんな二人をアフロディはスルーして、練習場へと向かう。

「おい待てよ！まったく、相変わらずマイペースな奴だぜ！」

「それはお前が言えた義理ではないと思うけど」

アフロディに続いてバーンとガゼルも練習場へと向かっていく。

「マルコ、ミスするなよ。あいつらにオレ達オルフェウスの力見せてやるんだ」

「お前こそな、ジャンル力。オレ達の絆見せてやるうぜ」

「そのノリは好きじゃないけど……」

マルコが笑顔でグーをジャンル力に向けると、ジャンル力も仕方なく、といったかんじではあるけど、グーを出してコンと鳴らした。

「ほら、シンイチモ」

「え？あ、うん」

マルコが変わらない笑顔で俺にグーを向けてきて、その中に混じれると思っていなかった俺は戸惑いながらもグーを突き出した。

「なにやっつてんだよ、ジャンル力。お前ももう一度」

「こいつとも？」

「何言っつてんだよ。正式にまだ決まっていなはいえ同じオルフェウスの仲間なんだぜ。仲良くやっついていかねーとチームの為にもならないぞ」

ジャンル力は少しの間俺とマルコの手を見ていたけど、溜息を吐いて先ほどと同じようにグーを差し出してきた。

「言っとくけど、オレはまだ仲間と決めたわけじゃないからな」

そういつて、さっきよりも少し大きめのコンと音を鳴らした。

「それじゃあそっちからどうぞ」

アフロディがそう告げる。その顔は余裕な表情をしている。ただ俺

達を侮っているだけなのかそれとも自信過剰なだけなのか・・・たぶん、どっちもだろう。

「いったな。行くぞ、ジャンルカ！シンイチ！」

「ああ！」

「ああ！・・・ってお前はDFだから後ろだろ」

たしかにそうだ。ちなみに、俺もジャンルカもMFだからFWはいない。・・・とはいっても3人で戦う練習だからポジションにそこまで大きな意味は無いけど。

「いいじゃん。こういうの言うのこの3人の中じゃ俺くらいだろ」

それもたしかにそうだ。ジャンルカは確実に言いそうにないし、俺もそんなキャラじゃない。

「まあいいか。・・・行くぞ！」

練習で3人とはいえ試合を模して行うから、通常の試合と同じようにジャンルカが俺にパスを回してくる。俺はそれを足で受け取って前へと進む。

「行かせるかよ！」

と、すぐに前にバーンが現れた。

「くっ」

なんとかかわそうとするけど、やっぱり俺じゃあ簡単に上手くいかず、なかなか切り抜けられない。

「くそ・・・ジャンルカ！」

突破できないと判断してジャンルカにパスを出す。

「無駄だね」

そこにガゼルが割って入り、ボールをとられてしまった。

「しまった！」

「さっそくだけど、いかせてもらおう！」

ガゼルがシュートを蹴る体制に入ると、一面が氷と化した。間に合わないかもしれないけど、あのボールを止めないと！俺は駆けだした。

「マルコ、必殺技が来るぞ！」

「おう！」

マルコがガゼルとゴールの間に割って入る。

「止められるものなら、止めてみるがいい！・・・ノーザン、インパクト！！」

ガゼルが蹴るとボールは氷の槍となつて放たれた。

「オレ達をなめるなよ！グラディウスレイン！」

マルコが足をあげると周りに無数の剣が出現した。マルコが足を下ろすと同時にその剣達が一斉にボールに襲い掛かった。

「なに！？」

「オレ達をなめるなつて言つただろ！」

「安心するのは早いぜ！」

勢いを殺され、転がるボールをバーンが蹴ってシュートを放った。

「あつ！」

「お前はいつも詰めが甘いな！」

どうやら俺と同じように戻ってきていたジャンルカが蹴り返し難を逃れた。

「それは、君もじゃないかな」

だけど、ボールが行く先には空中に浮かぶアフロデイがいた。

「・・・はあ！？」

そんなアフロデイをみたジャンルカはしまった、とかいう思いよりも『飛んでいる』アフロデイに驚きを隠せないでいた。その気持ちわかる。俺も最初見たときは信じられなかつたくらいだ。

「これで、決めさせてもらうよ！」

アフロデイが強力なシュートを放った。必殺技ではないけど、円堂（あくまで当時の、ではあるけどそれはアフロデイもだ）がマジンザハンドでやつと『なんとか』止める事ができたシュートだ。それでも・・・

「そうはいくか！」

それで諦めてたら前までと同じ。俺は強くなる、今までの自分から変わると決めただ。俺はそのシュートを蹴り返そうとする。だけ

ど・・・

「く、そ・・・！」

やはりかなり強力で蹴り返せなかった。

「うわ！」

結局ぶつ飛ばされ、俺は転がりボールはそのままゴールへと入ってしまった。

「シンイチ！」

マルコが俺の元に駆けつけて手を貸して立たせてくれた。

「大丈夫か？」

「いてて・・・うん、大丈夫。それより、ごめん。止めれなかった」

「そんなの気にすんなよ。それならオレやジャンルカだってあいつにシュートチャンスを与えたんだし。な、ジャンルカ？」

「・・・それでも、オレ達ならあのシュートを防ぐことはできたけどな」

その後も試合は続いたけど、なかなか俺達は点をとることができずにいた。バーンとガゼルを抜くことはできてもアフロディを抜くことがどうしてもできなかった。ジャンルカがテヴェレドリフトという必殺技を使ってもアフロディには意味をなさなかった。そして、守りではバーンとガゼルのシュートをマルコとジャンルカが防いで、最後にアフロディが蹴り俺が止めようとして吹き飛ばされる、というのが続いている。ジャンルカが言っていたように、二人ならアフロディの蹴りを止めることはできるかもしれないけど、何故か最後はアフロディと俺が対峙とになるように仕組まれている気がする。

「うわぁ！」

もう何度目かもわからず、俺はまた吹き飛ばされ地面を転がった。

「シンイチ！」

これも何度目かわからず、マルコがまた俺を立たせてくれる。

「傷だらけだぞ。本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。心配かけて、また止めれなくて・・・ごめん」

もう何点入れられているかわからない。俺が止められていれば、現状はもつと違ったのに。・・・ふと、アフロディ率いる世宇子中と戦った時のことを思い出した。あの時も今の俺と同じように皆ポロポロだった。点差こそなかったものの、それは世宇子中が『点を取る』というよりも、俺達を『潰す』ことに重視していたからだと思う。そして円堂は何度もアフロディのシュートを体に受けながらも諦めなかった。

「俺も、円堂みたいに、なれるかな・・・」

正直にいうと、俺は円堂のその諦めを知らない強さを憧れを抱いてんだと思う。一之瀬もそうだ。一之瀬は事故にあつてサッカーができないと医者に言われたらしいけど、諦めず頑張り続けてサッカーができるようになって今ではアメリカ代表にまでなっている。土門や秋が「円堂と似ている」と言ったのはこのこともさしているんだと思う。けど俺は、尊敬していた父から虐待を受けたシヨックでサッカーをやめてしまっていた。円堂みたいに皆を引き付けるカリスマ性を持ちたいわけじゃないけど、その強さには近づきたいと思う。「半田君、君の頑張りは認めるけど、努力だけで、人は神に勝てないよ」

また、同じような流れで俺とアフロディが対峙する形となった。

「そんなの、やってみないとわからないだろ？」

「そうだね。それは認めよう。円堂君のような存在もいるわけだしね。でも、そんな人間そうはいないんだよ」

アフロディが翼を生やし空に舞った。そして、蹴る体勢に入った。

あの体勢はゴッドノウズ・・・いや、違う？

「人間が神に勝てない証明を見せてあげるよ・・・ゴッドブレイク！！！」

ボールが強力な光の玉となり凄い勢いで迫ってきた。俺が見たことあるゴッドノウズよりも威力がある。

「うわーーーーー!!!」

今度は為す術もないまま今まで以上に吹き飛ばされた。

「シンイチー!!」

「これでわかったかな？人が神には勝てないということが」

アフロデイが余裕の表情で俺に尋ねてきた。俺はマルコに立たせてもらいながらアフロデイを見返す。

「まだ、俺は諦めてない」

「ふん……」

「ゴッドブレイク!」「ウツ!」「ゴッドブレイク!」「ぐあー!」

「ゴッドブレイク!」……

その後も、俺は何度も何度もアフロデイと対峙しては吹き飛ばされた。

「……正直、君がここまで粘り強いとは思わなかったよ」

そしてまた俺はアフロデイと対峙している。ちなみに俺はもう返事をする元気がない。

「だけど、もうそろそろ時間が迫ってきてるからね。次が最後だよ」ところで、いつのまにか目的が『俺がアフロデイのシュートを止めるか』になっている気がする。まあいいけど……。

「神が君に引導を渡してあげよう。……ゴッドブレイク!!」

これが最後のチャンス。今まで一度も止めることができなかった。……まあでも、こんな俺でも諦めずに頑張れることがわかったんだし、いいか。最後まで、気を抜いて楽に（本気は本気だけ）しよう……そう思いながら俺は蹴り返そうとして……

「……え?」

俺は吹き飛ばされず、ボールはアフロデイのいる反対側に転がっていた。

「……まさか最後の最後で止められるなんてね」

アフロデイが肩を竦めながら言った。……俺、止めれたのか?

「シンイチー! すごいじゃん!」

俺が呆然としていると駆け寄ってきたマルコが飛びついてきた。

「なんだよさっきの!?!」

「・・・俺、やった・・・のか・・・？」

「ああ！・・・自分でわかってないのか？」

「よく覚えてない。風を感じたけど」

ボールを蹴り返そうとしたとき、風を感じただけは覚えている。だけど、そこから先どうやったのかは覚えていない。

「・・・でも、そっか・・・良かった・・・」

そこで俺は体の力を失って、マルコへともたれかかってしまった。

「シンイチ！？」

「・・・どうやら寝てしまったみたいだな」

「・・・一瞬、頭でも打ったんじゃないかと考えたけど、そっか・・・良かった」

「まあ無理もないな。あれだけボロボロにされてしまえば」

「そんな怖い顔しないでほしいな。これも、君達の監督から頼まれたことなんだよ？」

「え！？」

「名前とかはきいてなかったけど、『君が戦ったことがある雷門中の選手一人を容赦なく叩き潰して鍛えてほしい』って」

「監督が・・・でも、なんでお前なんかに？」

「なんか、とは失礼だね。まあいいけど。僕は一度雷門中の皆を叩き潰したことがあるからね　結果的に負けちゃったけど

それで、もう一度叩き潰したら諦めない根性をみにつけれるんじゃないか、ということらしいね。本当にそうなるとは思ってなかったけど」

「そうだったのか」

「というわけでボクの用事はこれで終わりだ。半田君のことはまかせたよ。バーン、ガゼル、行くよ」

「なんだよそれ。俺達人数合わせなだけだったのかよ」

「そうだとわかっていればお前なんかについてこなかったのに」

「だから言わなかったんだよ」

「・・・行っちゃったな」

「ああ。だが、予選落ちメンバーとはいえ、手強い相手だったな」

「だな。ゴッドブレイクだっけ？あの必殺技、俺でも返せるかわからねえよ」

「・・・何か言いたそうだな」

「別に？・・・それはそうと、さっきお前、シンイチをボコボコにした事でアフロディに怒ってたよな」

「・・・それは別にこいつを想ってとかじゃない。俺はあんなサッカーを認めたくなかっただけだ」

「ふくん・・・まあいいけど」

「勘違いしてるだろ」

「お前がそう思ってたことは、実はそうなんじゃないの？」

「知らん」

「・・・ジャンルカも素直じゃないな。ま、よくがんばったなシンイチ。おつかれさま」

ドタバタな日常

宿舎に戻ってくると、シンイチとマルコ、ジャンルカがいなかったけど、少し待っていると帰ってきた。

「シン!？」

シンイチがボロボロの状態でマルコに背負わされてる状態を見て驚いて駆け寄った。

「マルコ、シンに何があつたんだ!？」

「お、おう・・・落ち着けよファイディオ」

たぶん、オレは剣幕が凄くなってるんだろう。マルコが怖気ついてるけどそんなの気にしてられない。

「落ち着いてなんかいられない!なんでシンがこんな!」

「ファイディオ、たしかにこいつはボロボロだが、今は寝ているだけだ」

「・・・え?」

ジャンルカが俺の肩に手を置きながら言ってきた。・・・寝てるのか?

「そうなのか?てつきり、意識をなくしてるんだと・・・」

「なんで一気にそこまで思考が行くんだよ」

マルコが溜息を吐きながら言った。・・・たしかにそうだけど。

「じゃあ、シンイチは無事なのか?」

「まあ確かに怪我だらけだから無事、とは言えないかもだけど別に重症とかじゃないぜ」

「そっか。・・・良かった」

俺は安堵して溜息を吐いた。シンイチは別れる直前、父の虐待のせいでボロボロになっていた。・・・シンイチ本人はそのことを一言も言わなかったけど。その時の事があつたからちよつと過剰に反応してしまつたかもしれない。

「・・・ファイディオが取り乱すなんて珍しいな」

と、さつきまでオレ達（とこいりもオレ）の様子を見ていたアンジェロが呟いた。・・・
そう言われると恥ずかしいな。

「そういえばさつきシンイチのこと『シン』って言ってたよな？・・・
あれって？」

マルコが思い出したように訪ねてきた。・・・そういえばそう呼んだ気がする。シンイチのボロボロの姿を見て慌てた為そう呼んでしまった。

「・・・昔、俺の事をそうフィディオが呼んでたんだ」

マルコに背負わされているシンイチが目を開けて言った。どうやら目を覚ましたみたいだ。

「お、シンイチ起きたのか。もう大丈夫なのか？」

「・・・痛い所々あるけど、平気。・・・それより、おんぶさせてしまつてごめん」

「いいつて、気にすんなよ。フィディオも軽いけど、それ以上に軽かったし」

「・・・男としてはあまり嬉しくないな。重いのも嫌だけどさ」

たしかにオレやマルコ曰くシンイチもマルコ達と比べると軽いとは思う。けど、別に標準以上に軽いわけではないと思うんだけど。

「マルコ、俺は大丈夫だからそろそろ降ろしてくれないか？」

「え〜？別に俺は大丈夫だぜ？」

「お前が大丈夫云々じゃなくて俺が大丈夫って言つて・・・って何してるんだよ！」

マルコがシンイチを降ろしたかと思うとそのまま今度はお姫様抱つこのように抱え上げた。・・・オレもやったことないのに。

「ほら、こうやつても全然苦じゃねえし」

「『ほら』じゃない！とにかく早く降ろせ・・・フィディオ？」

歩み寄つて抱きかかえられているシンイチをじ〜つと見つめているとシンイチが何か怯えたような表情になった。

「ど、どうしたんだよ・・・」

「・・・オレもやりたい」

「は？」

何を言ってるんだこいつは？という顔をしているシンイチを無視して、彼をマルコから奪って（？）同じようにお姫様抱っこしてみる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・何やってるんだー！ー！」

シンイチが真つ赤になりながら怒鳴った。

「うわ、たしかにマルコが言うように軽いね」

もしかしたら標準よりも軽いかもしれない。

「だろ？」

「『軽いね』『だろ？』じゃなくて早く降ろせー！ー！」

「シンイチ、もつと肉とか食べた方がいいんじゃない？」

「もちろん野菜とかも食べて栄養偏らないようにしろよ？」

「余計なお世話だ！というかいい加減降ろせ！」

「二人とも、シンイチが怒ってるぞ。いい加減降ろしてやれ」

ジャンルカが溜息を吐きながら言ってきた。

「え〜？」

せつかくの機会だからもつと堪能していきたい。普段だったらたぶんしようと思っても無理だし。

「え〜？じゃないよ。・・・なんかフィディオ壊れてない？」

アンジェロもジャンルカに加わってきた。というか壊れてるって？

「そんなことはないと思うけど」

「壊れてないなら壊れてないで、それも怖いけど」

アンジェロは何を言ってるんだろう。・・・まあいいや。とにかくシンイチを降ろした。

「ふ〜、助かった」

シンイチが胸に手をあてて息を吐いた。なんかオレ達が襲ってるみたいだ。・・・と、そんなシンイチに新たな影が迫った。

「ジャンルカ？」

さつき、オレに降ろすよう言っていたからか、シンイチが無警戒にジャンルカに振り向いて・・・再び抱き上げられた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一体なん

なんだよ!!!」

再びシンイチが真っ赤になりながら怒鳴った。

「そつだよジャンルカ。オレに降ろすよう言っというてシンイチを奪うなんて卑怯だ」

「駄目だ・・・ファイディオが本当に壊れてる」

だからアンジエロは何を言ってるんだろう？

「『そつだよ』って何がだよ! 『卑怯』とかじゃなくて降ろせ!」

「いや、本当に軽いのか試したくなってな」

「とうかなんかシンイチ可愛いし」

「わざわざお姫様抱っこする必要ないし! それにマルコ! 可愛いなんて言われても嬉しくない! というより俺は可愛いくない!」

「え〜? 可愛いじゃん、なあファイディオ?」

「うん」

「ファイディオも真顔で頷くな! それよりももういいだろ! 早く降ろせよジャンルカ!」

「いや、まだ計測ができていない」

「ジャンルカも真顔でよくわからないことを言うな!」

「・・・ジャンルカまで壊れた」

「アンジエロもやってみれば?」

「え?・・・」

「マルコ何言ってるんだよ!・・・アンジエロ、なにその眼。もしかしてお前も、なんてことないよな? ないですよね? ないって言うてください」

「そつだよマルコ! ジャンルカ、次はオレの番だから!」

「ファイディオお前もう黙れ!」

「お前はさっき長い間していたじゃないか。少しは我慢してオレ達に譲れ」

「ジャンルカも真顔で喋るな! お前がなんか一番怖いし!」

「あ、オレは怖くないよな? じゃあ次オレね」

「『じゃあ』じゃない! 次とか先とか俺を物みたいに扱うな!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2677v/>

イナズマイレブン世界への挑戦！オルフェウスIF

2011年10月9日13時44分発行